

ISSN 2759-6591

東日本大震災・原子力災害伝承館

The Great East Japan Earthquake and Nuclear Disaster Memorial Museum

年次報告書（令和 6 年度）



館長挨拶



東日本大震災・原子力災害伝承館は、2011年の東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故という未曾有の複合災害の記録と記憶を防災、減災の教訓として国内外に発信し、未来につなぐことを目的として、2020年（令和2年）9月に開館しました。

開館直後は、新型コロナウイルス感染症の状況に左右される環境でしたが、令和5年5月に5類感染症に移行して以降は来館者数も伸び、令和6年7月には来館30万人を達成しました。現在では38万人を超える方に来場いただいております、これも関係者の皆様の継続的なご支援の賜物であると、改めて感謝申し上げます。

さて、令和6年度は、放射線の影響や現状を改めて理解してもらうため、前期企画展として「福島と放射線」を開催し、あわせて伝承館周辺の被災地を巡って空間線量率を測定するバスツアーを実施しました。また後期企画展では、伝承館常任研究員の企画により「長期避難と祭り」を開催し、地域住民の絆である伝統芸能の活動再開に向けた想いを伝えました。このように特定のテーマに基づく企画展の実施は伝承館の知見や資料を有効に活用し来館者の更なる学びに繋げることができる非常に有効な取組であり、今後も継続していきたいと考えています。

また、フランス・モンベリアール市の科学博物館「Pavillion de Science（サイエンスパビリオン）」にて伝承館初となる海外での出張展示を開催し、福島の複合災害の記憶や記録を世界の教訓として発信する貴重な機会を得ることができました。

研究事業については、4名の常任研究員が上級研究員の指導の下で精力的に研究活動を行い、学会発表や論文執筆のほか伝承館で研究成果のポスター展示を行うなどその成果を広く発信しました。令和7年6月に新たに研究活動をサポートするポストを新設したところであり、今後も研究体制をより一層強化していきたいと考えております。

福島の復興は途上であるものの着実に進んでおり、福島イノベーション・コースト構想の実現に向けて新産業の集積も進みつつあります。その中で、複合災害の記憶や教訓、復興の状況等を国内外へ発信する伝承館の役割はますます重要になっていくと思います。伝承館を、国内外の多くの方が複合災害の教訓を学び、復興の大切さを学ぶことができる場とすべく、スタッフ一同、今後もさらなる努力を続けていきたいと考えておりますので、引き続き御理解、御支援のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

令和7年7月

東日本大震災・原子力災害伝承館 館長 高村 昇

東日本大震災・原子力災害伝承館の“基本理念”と “基本理念に基づいた4事業の実施”

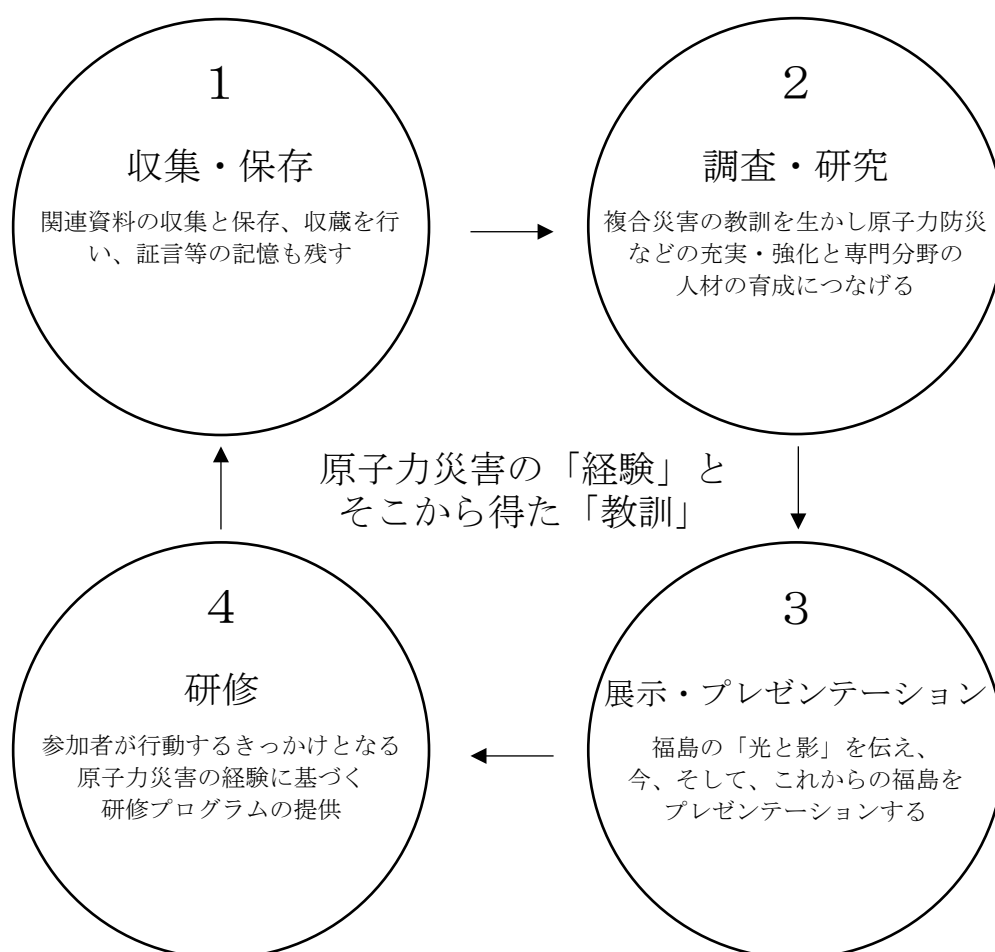
基本理念

世界初の甚大な複合災害の記録や教訓と、そこから着実に復興する過程を収集・保存・研究し、風化させず後世に継承・発信し、世界と共有することは被災した人々の共通の願いである。

東日本大震災・原子力災害伝承館では、特に福島だけが経験した原子力災害をしっかりと伝えるために、次の3つの基本理念を掲げる。

1	原子力災害と復興の記録や教訓の 未来への継承・世界との共有
2	福島にしかない経験や教訓を生かす 防災・減災
3	福島に心を寄せる人々や団体と連携し、 地域コミュニティや文化・伝統の再生、復興を担う人材の育成等による 復興の加速化への寄与

基本理念に基づいた4事業の実施



施設概要

1. 施設の概要

設置者	福島県
管理運営	公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構が福島県から指定管理を受託
施設の設置場所	〒979-1401 福島県双葉郡双葉町大字中野字高田 39
開館日	令和2年9月20日
開館時間	午前9時から午後5時（午後4時30分最終入館）
休館日	火曜日（火曜祝日の場合は翌平日）・年末年始（12/29～1/3）
入館料	大人：600円、小中高：300円、未就学児：無料 大人団体（20名以上）：480円、小中高団体（20名以上）：240円
延べ床面積	延床面積 5,256.56 m ² （1F：約 2,675 m ² 、2F：約 2,385 m ² 、3F：約 195 m ² ）
構造・規模	地上3階、鉄筋コンクリート構造（一部鉄骨造）
駐車場利用可能台数	大型バス：10台、普通車：111台

2. 設置目的

地方自治法第244条第1項の規定に基づき、東日本大震災における甚大な災害に見舞われた福島県の記録、教訓及び復興のあゆみを着実に進める過程の資料を収集、保存及び研究し、決して風化させることなく後世に引き継ぎ、国内外と共有するとともに、福島イノベーション・コースト構想の推進及び本県の復興の加速化に寄与するため、東日本大震災・原子力災害伝承館を設置する。（東日本大震災・原子力災害伝承館条例第1条）

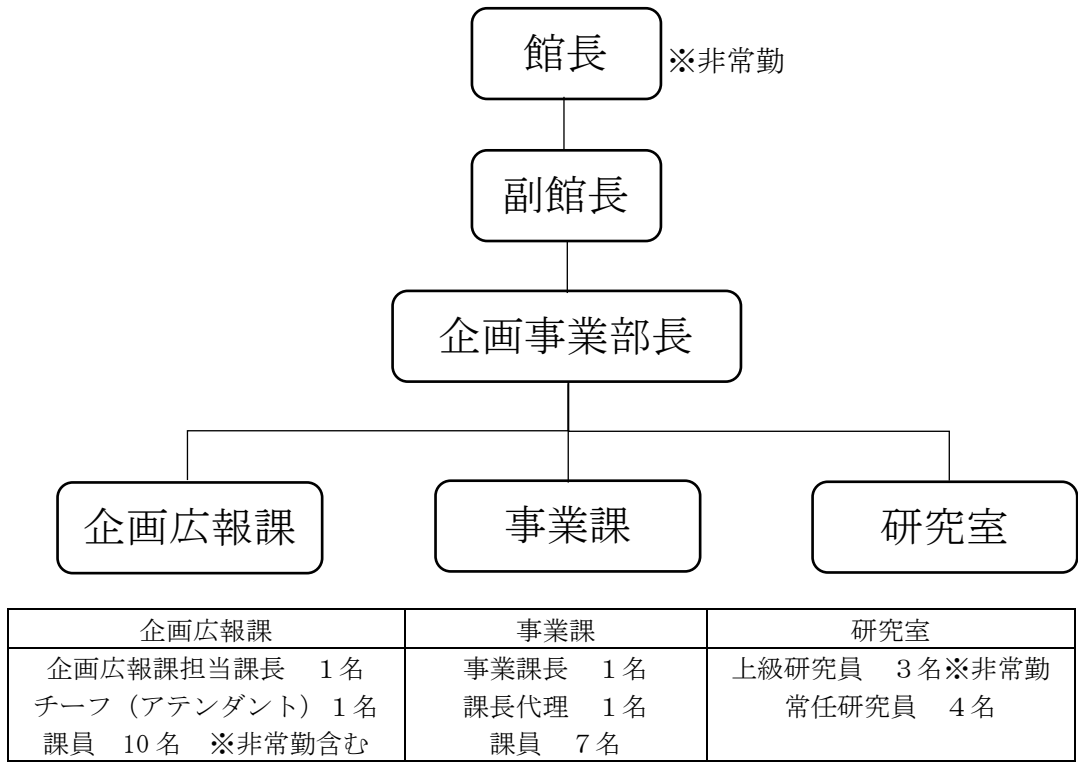
3. 施設沿革

平成27年3月31日	国の「イノベーション・コースト構想個別検討会」の中間整理において、福島県でのアーカイブ拠点に関する研究会の立ち上げを指示
平成27年4月～8月	福島県において「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設有識者会議」を設置、当該会議を5回開催〔施設の必要性の有無を検討〕
平成27年9月	本有識者会議において報告書をまとめ、福島県知事へ提出
平成28年6月～12月	福島県において「拠点施設基本構想策定に係る検討会議（4回）」を実施〔施設の具体的な規模や機能、立地場所等を検討〕
平成29年3月27日	福島県の「新生ふくしま復興推進本部会議」において「拠点施設基本構想」を決定〔立地場所や基本理念、展示ストーリー等〕
平成30年4月25日	福島復興特措法に基づく「重点推進計画」に認定〔施設の管理運営は、指定管理者制度に基づく福島イノベ機構での運営を検討すると明記〕
令和2年9月20日	東日本大震災・原子力災害伝承館 開館

4. 組織体制

令和7年3月31日現在、東日本大震災・原子力災害伝承館の構成員は、以下のとおり館長、副館長、企画事業部長、研究室及び各課の構成員を合わせた32名である。

また、受付は、外部委託のスタッフで運営している。



東日本大震災・原子力災害伝承館 年次報告書 目次

- ・館長挨拶
- ・東日本大震災・原子力災害伝承館の“基本理念”と“基本理念に基づいた4事業の実施”
- ・施設概要

1章	利用者状況	1
1節	来館者数	2
2節	学校団体来館者数	3
3節	来館者アンケートの概要	5
4節	V I P等の視察対応	8
2章	展示	9
1節	常設展示	10
2節	企画展示	13
3節	出張展示	15
4節	エントランス展示	18
3章	資料収集・保存	23
1節	資料収集・保存・収蔵	24
2節	資料閲覧室	27
4章	語り部	29
1節	館内語り部講話	30
2節	館外での語り部講話、交流	33
5章	研修	35
1節	一般研修	36
2節	専門研修	37
6章	調査・研究	41
1節	概要	42
2節	常任研究員の取組	43
3節	報告会等	64
4節	福島国際研究教育機構（F-REI）との連携	66
5節	その他	67
7章	イベント・広報	69
1節	イベント	70
2節	広報	74
8章	東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会	77
1節	東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会	78
9章	東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事	79

1 章 利用者状況

1節 来館者数

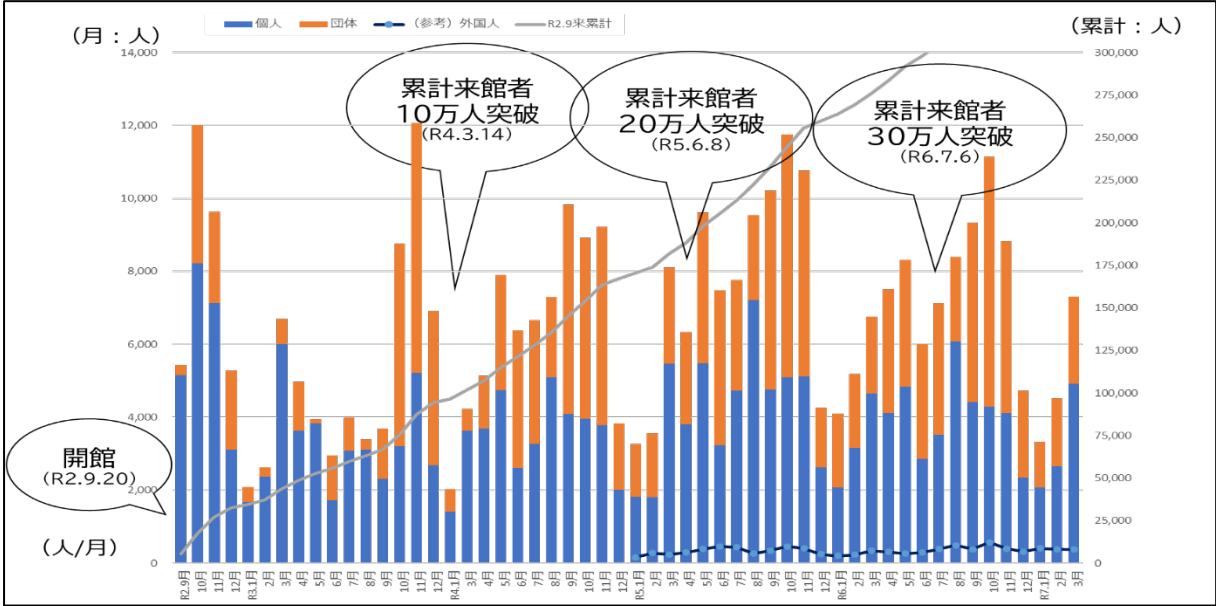
来館者数の推移

令和2（2020）年9月20日 東日本大震災・原子力災害伝承館 開館

令和6（2024）年7月6日 累計来館者数 30 万人に到達

開館日数

令和6年度：307 日



令和6年度

(単位：人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
個人	4,111	4,832	2,861	3,527	6,079	4,422	4,283	4,121	2,346	2,075	2,659	4,921	46,237
団体	3,399	3,483	3,135	3,610	2,316	4,908	6,861	4,716	2,388	1,249	1,864	2,385	40,314
合計	7,510	8,315	5,996	7,137	8,395	9,330	11,144	8,837	4,734	3,324	4,523	7,306	86,551

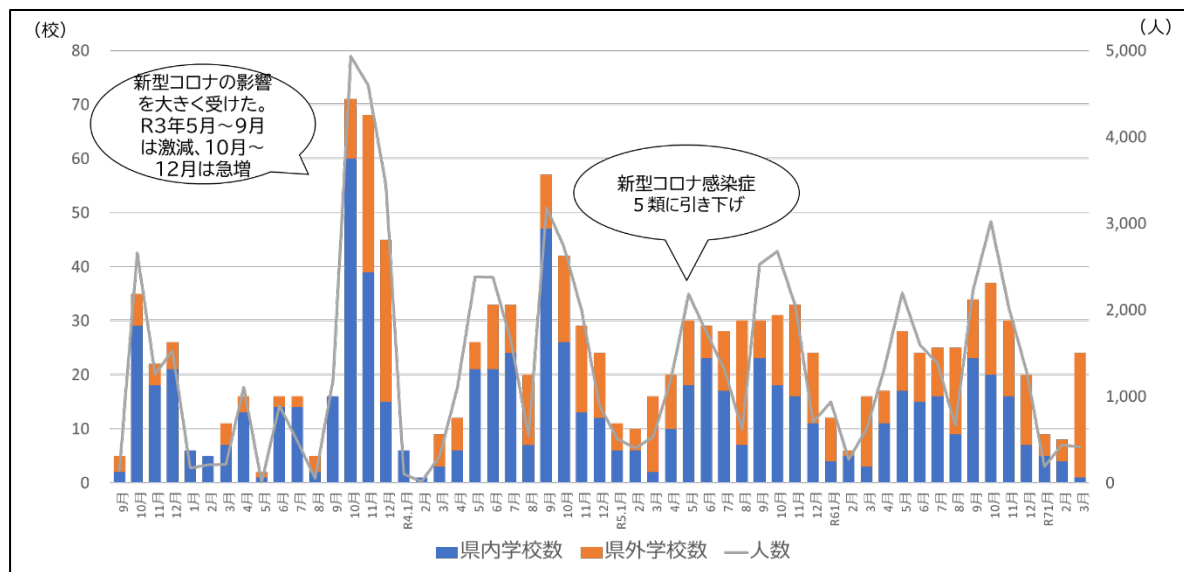
年度別来館者数

(単位：人)

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	合計
個人	33,653	34,978	42,346	51,941	46,237	209,155
団体	10,097	23,293	37,773	41,818	40,314	153,295
合計	43,750	58,271	80,119	93,759	86,551	362,450

2節 学校団体来館者数

学校団体数及び学校団体来館者数



令和6年度学校団体数及び学校団体来館者数

(来館者数単位:人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学校団体数	17	28	24	25	25	34	37	30	20	9	8	24	281
県内	11	17	15	16	9	23	20	16	7	5	4	1	144
県外	6	11	9	9	16	11	17	14	13	4	4	23	137
来館者数	1,321	2,196	1,593	1,384	666	2,224	3,021	2,032	1,284	190	441	412	16,764

年度別学校団体数及び学校団体来館者数

(来館者数単位:人)

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	合計
学校団体数	110	269	313	289	281	1,262
県内	88	184	191	154	144	762
県外	22	87	122	135	137	500
来館者数	6,182	17,105	18,277	16,824	16,764	75,152

1章 利用者状況

令和5年度学校団体数及び学校団体来館者数

(来館者数単位：人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学校団体数	20	30	29	28	30	30	31	33	24	12	6	16	289
県内	10	18	23	17	7	23	18	16	11	4	5	2	154
県外	10	12	6	11	23	7	13	17	13	8	1	14	135
来館者数	1,194	2,181	1,736	1,312	615	2,525	2,676	2,050	705	938	270	622	16,824
県内	662	1,410	1,049	613	185	2,103	1,339	729	374	132	203	44	8,843
県外	532	771	687	699	430	422	1,337	1,321	331	806	67	578	7,981

令和4年度学校団体数及び学校団体来館者数

(来館者数単位：人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学校団体数	12	26	33	33	20	57	42	29	24	11	10	16	313
県内	6	21	21	24	7	47	26	13	12	6	6	2	191
県外	6	5	12	9	13	10	16	16	12	5	4	14	122
来館者数	1,097	2,380	2,376	1,649	539	3,181	2,735	1,996	889	507	402	526	18,277
県内	665	1,841	849	1,307	127	2,754	1,682	1,198	406	216	273	26	11,344
県外	432	539	1,527	342	412	427	1,053	798	483	291	129	500	6,933

令和3年度学校団体数及び学校団体来館者数

(来館者数単位：人)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学校団体数	16	2	16	14	5	16	71	68	45	6	1	9	269
県内	13	1	14	13	2	16	60	39	15	6	1	3	183
県外	3	1	2	1	3	0	11	29	30	0	0	6	86
来館者数	1,104	5	888	485	50	1,180	4,929	4,602	3,440	104	17	301	17,105
県内	817	2	565	461	34	1,180	4,403	1,780	1,027	104	17	139	10,529
県外	287	3	323	24	16	0	526	2,822	2,413	0	0	162	6,576

※ 令和4年度年次報告書に掲載の「令和3年度月別学校団体数及び学校団体来館者数」に誤りがありました。正しくは上記の表になります。お詫びして訂正します。

令和2年度学校団体数及び学校団体来館者数 (来館者数単位：人)

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学校団体数	5	35	22	26	6	5	11	110
県内	2	29	18	21	6	5	7	88
県外	3	6	4	5	0	0	4	22
来館者数	146	2,659	1,252	1,529	169	210	217	6,182
県内	72	1,956	870	1,028	169	210	118	4,423
県外	74	703	382	501	0	0	99	1,759

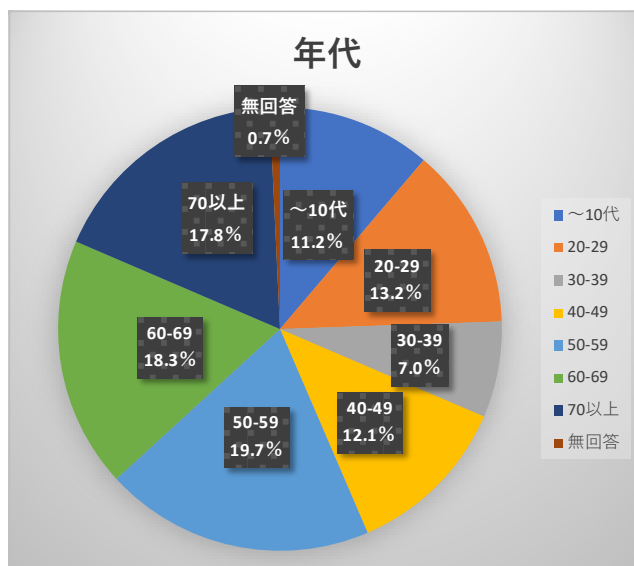
3 節 来館者アンケートの概要

来館者の属性や施設の評価を把握するため、館内にアンケート記入台を設置し、一般来館者のアンケートを実施している。

- ・ 回答数：6,330 件
- ・ 期間：令和6年4月1日～令和7年3月31日

性別	回答数	構成比
男性	3,519	55.6%
女性	2,467	39.0%
無回答	344	5.4%
合計	6,330	100.0%

年代別	回答数	構成比
～10代	710	11.2%
20-29	838	13.2%
30-39	443	7.0%
40-49	765	12.1%
50-59	1,244	19.7%
60-69	1,156	18.3%
70以上	1,127	17.8%
無回答	47	0.7%
合計	6,330	100.0%



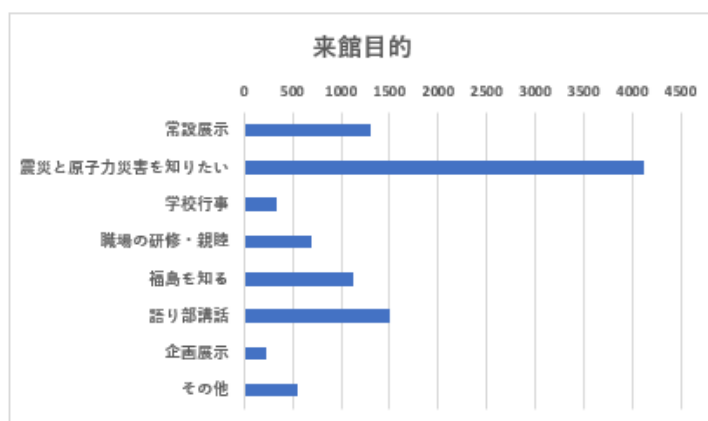
県内外の別	回答数	構成比
県外		
国内	4,651	73.5%
海外	37	0.6%
県内	1,528	24.1%
無回答	114	1.8%
合計	6,330	100.0%

来館回数	回答数	構成比
1回	4,920	77.7%
2回	494	7.8%
3回以上	302	4.8%
無回答	614	9.7%
合計	6,330	100.0%

来館目的

常設展示	1,307
震災と原子力災害を知りたい	4,117
学校行事	345
職場の研修・親睦	695
福島を知る	1,134
語り部講話	1,498
企画展示	226
その他	550

※複数回答可



展示内容 満足度

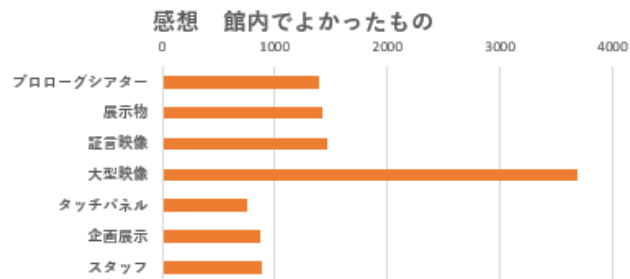
満足度	回答数	構成比
5	3,861	61.0%
4	1,493	23.6%
3	373	5.9%
2	46	0.7%
1	20	0.3%
無回答	537	8.5%
合計	6,330	100.0%

5段階評価 5が最高評価

感想 館内でよかった

プロログシアター	1,396
展示物	1,420
証言映像	1,469
大型映像	3,679
タッチパネル	760
企画展示	864
スタッフ	877
その他	3,652

※複数回答可

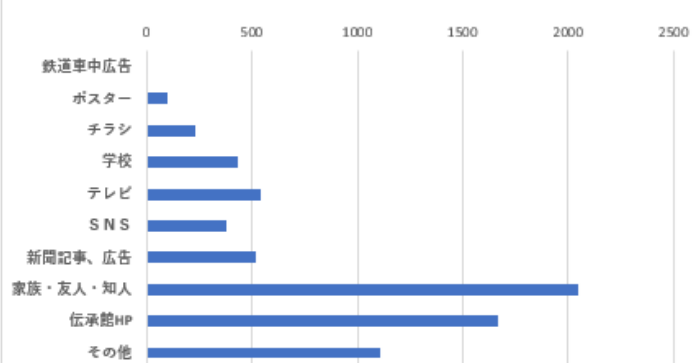


情報媒体 件数

鉄道車中広告	9
ポスター	97
チラシ	235
学校	431
テレビ	542
SNS	376
新聞記事、広告	515
家族・友人・知人	2,046
伝承館HP	1,666
その他	1,107
合計	7,024

※複数回答可

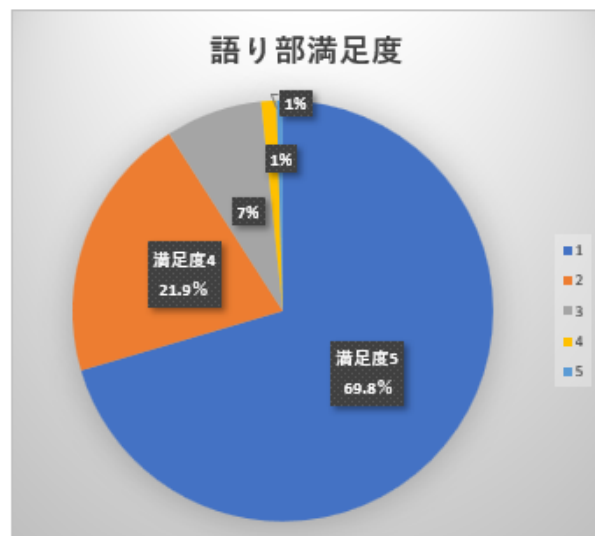
情報媒体



語り部 満足度

満足度	回答数	構成比
5	3,854	70.4%
4	1,121	20.5%
3	407	7.4%
2	64	1.2%
1	26	0.5%
無回答	858	
総計 録音者一覧目書	5,472	100.0%

5段階評価 5が最高評価



地域別入館者総計6,330人(内、未記入 114人)

県外内訳

順位	県別	人数	構成比
1	東京都	966	20.8%
2	神奈川県	481	10.3%
3	埼玉県	380	8.2%
3	茨城県	380	8.2%
5	宮城県	347	7.5%
6	千葉県	324	7.0%
7	栃木県	172	3.7%
8	愛知県	125	2.7%
9	大阪府	124	2.7%
10	岩手県	101	2.2%
	その他	1,106	23.8%
	無回答	145	3.1%
合計		4,651	100.0%

県内内訳

順位	自治体別	人数	構成比
1	福島市	221	14.1%
2	郡山市	219	13.9%
3	いわき市	211	13.4%
4	南相馬市	87	5.5%
5	会津若松市	78	5.0%
6	二本松市	73	4.6%
7	喜多方市	51	3.2%
8	須賀川市	45	2.9%
9	田村市	41	2.6%
10	相馬市	33	2.1%
	その他	367	23.4%
	無回答	145	9.2%
合計		1,571	100.0%

4節 VIP等の視察対応

伝承館では、政府、地方自治体、海外の要人などの視察を積極的に受け入れており、館長または副館長が対応している。

令和6年度の視察受け入れ実績は、99件、951人であった。

区分	件	人	主な団体等
政府関係者	21 件	122 人	・土屋復興大臣（4/8） ・総務省消防庁長官（12/4） ・伊藤復興大臣（2/8）
海外要人等	19 件	231 人	・駐日カナダ大使（4/8） ・駐日フランス大使（6/7） ・ドイツ連邦共和国議員団（7/10） ・駐日韓国大使（9/26） ・駐日ドイツ大使（11/15）
地方自治体関係者	26 件	251 人	・富山県議団 6 名（10/16） ・静岡県議団 8 名（2/11）
民間企業幹部、大学等	33 件	347 人	・長崎大学長（4/17） ・JR 東日本社長（5/25）
合計	99 件	951 人	

※ 随行者を含む



駐日ドイツ大使

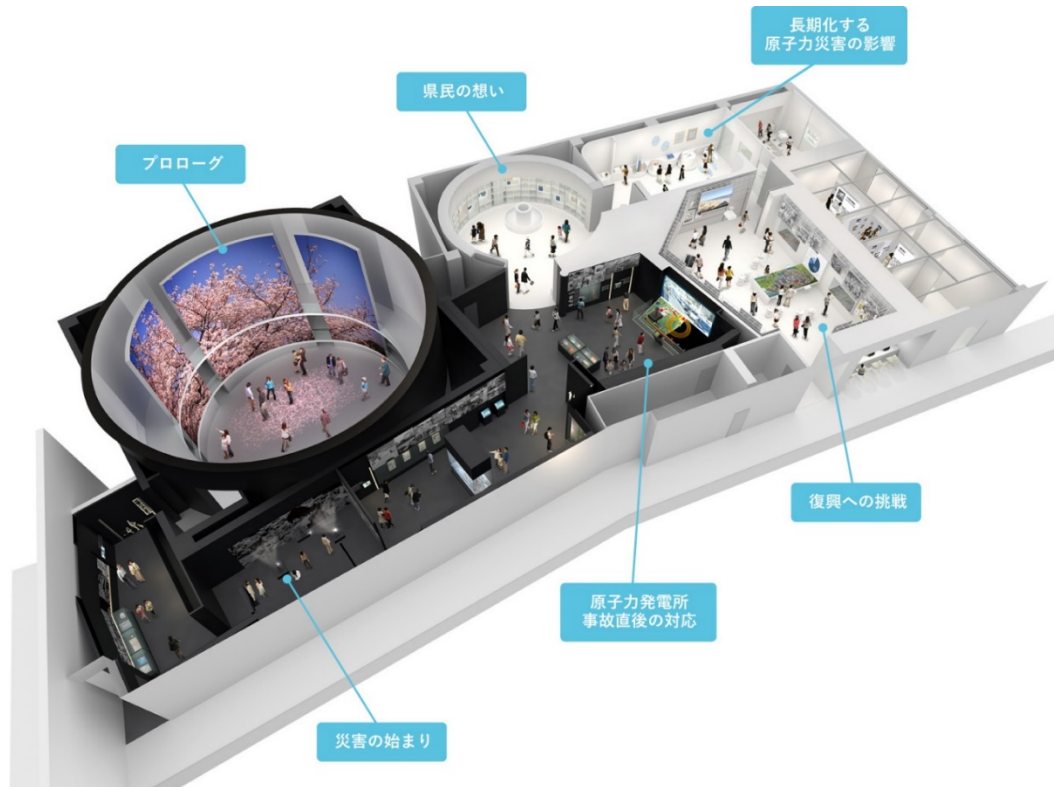


長崎大学長

2章 展示

1 節 常設展示

1. 展示資料



(東日本大震災・原子力災害伝承館 展示室全体像)

(1) プロローグ

原子力発電所建設当時の様子や地震・津波、そして原発事故発生から住民避難、復興や廃炉に向けた取組みについて、床面を含めた映像を上映している。



(2) 災害の始まり

事故前・事故発生時・事故直後の経過を「事故前の暮らし」「東日本大震災～地震と津波の記録～」「原子力発電所事故の発生」「災害対策本部の記録」として時系列でたどり、原子力災害の始まりを克明に、臨場感と共に展示している。

(3) 原子力発電所事故直後の対応

これまで経験したことのない原子力発電所事故発生直後の状況やその特殊性を、様々な資料や証言等をもとに振り返ります。錯綜する情報、転々とする避難生活、国内外の反応と支援を、「避難の開始」「県内に広がる不安」「国内外の反応と支援」に分けて展示している。



(4) 県民の想い

震災前の平穏な「ふるさとの日常」と、その「日常」が原発事故を機にどのように変わってしまったのか、県民の様々な想いを「災害時に感じた不安・恐れ」「学校生活の思い出・変化」「家族や地域生活との別れ・変化」「生活基盤の変化・将来への想い」という4つのコーナーに分け、証言映像と思い出の品等の実物展示を組み合わせで展示している。



(5) 長期化する原子力災害の影響

長期化した原子力災害について、資料や専門家による解説映像等を通して学ぶことができます。「除染」「風評の払拭」「長期避難への対応」「健康に関する取り組み」の4つのテーマを展示している。



(6) 復興への挑戦

困難を乗り越え復興に挑戦する福島県の姿を紹介している。「復興のあゆみ」「廃炉の今」「みらいのまち」「福島イノベーション・コースト構想の取り組み」、そして、「県民によるチャレンジ」を発信することで、県内の他施設、地域への回遊を促すとともに、まちづくり体験等により、来館者の方々に福島県の未来について考えるきっかけを作っている。



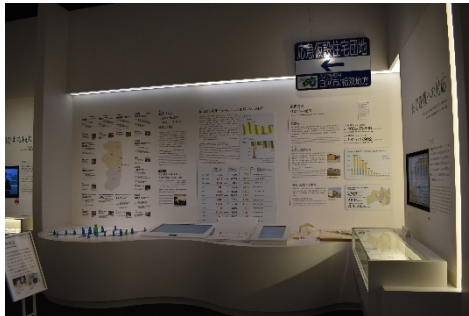
2. 展示更新

令和7年2月26日～2月28日を臨時休館とし、常設展示室の更新を行った。

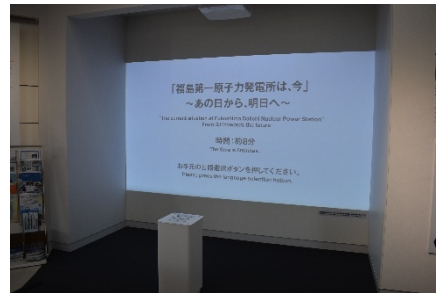
(1) 多言語対応として英語・簡体字・繁体字・韓国語の展示解説ガイドを追加



(2) 第4ゾーン「長期避難への対応」の改修



(3) 第5ゾーン「廃炉の今」の改修



(4) プロローグシアターへの西田さんに関する説明を追加

(5) タッチパネルコンテンツの情報更新

(6) 実物資料の追加・入替を行い、総展示点数を約300点に



2節 企画展示

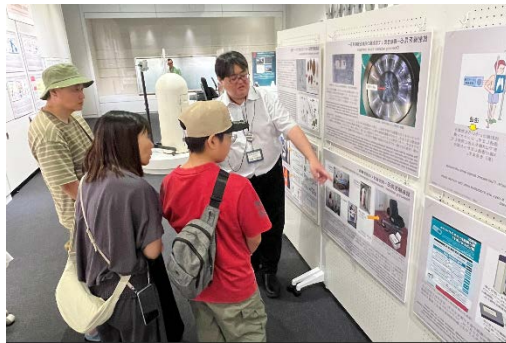
1. 福島と放射線～いま、あらためて知る放射線と災害～

東日本大震災・原子力災害伝承館では常設展示や企画展示（例：モノ/人が語る原子力災害など）で原子力災害をテーマとした展示を開催してきた。しかし、放射線や放射能の基本的な知識については、常設展でも十分な説明がなされてこなかった。

そこで令和6年度の前期企画展では、福島原子力災害を理解するうえで必要となる、放射線・放射能の基礎知識を伝えることをテーマと、放射線の基礎知識に加え、福島原子力災害被災地で観測された放射線や空間線量の変遷、避難指示区域の変遷などを実物の展示とパネル解説を交えながら丁寧に解説した。

ア 期間 令和6年7月20日（土）～11月25日（月）

イ 展示風景



2. 長期避難と祭り－伝統文化がつなぐ地域住民の絆－

後期の企画展では、葛西常任研究員と共同で双葉8町村と飯舘村の伝統芸能について取り上げた。全25団体の代表者インタビューや実際に使用していた、もしくは使用されている祭具を展示した。

ア 期間 令和6年12月21日(土)～令和7年3月24日(月)

イ 展示風景





東日本大震災・原子力災害伝承館
2024年度 企画展

長期避難と祭り

～俗文化がつなぐ地域住民の絆～

夏が来れば流れてきた聖や太鼓の音色。正月は集落内の各家を回って神楽の奉納。このような習慣が2011年3月11日の日に途絶えました。東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故後、多くの人が避難を余儀なくされました。しかし、人々はどのような中でも、その地域に属していた。神事や「祭り」を復活させるために再度集まっています。今回の企画展では、この「神事」「祭り」がコミュニティ復活への兆しとなる可能性に着目し、活動再開に向けた思いや奮闘する姿を紹介します。

会期 2024年12月21日(土) - 2025年3月24日(水)




東日本大震災・
原子力災害
伝承館

開催時間：9時～17時（最終入館16時30分）
入館料：一般400円・小中高300円
※企画展は常設展の入場料でご覧いただけます。

[illegible]

3. 関連イベント

企画展に関連したイベントを実施した。

(1) バスツアー「空間線量を測ろう」

学芸員などの解説を聞きながら、伝承館周辺を巡り、さまざまな場所で空間線量率を測るバスツアー。

ア 日 時 令和6年8月4日（日）、10月13日（日）
各日 13時～15時

イ ルート 伝承館→見晴台→請戸小学校→旧国道6号→双葉南小学校
→J R 双葉駅前→伝承館

ウ 参加者 1回目は17名、2回目は19名が参加した。

(2) 子ども実験教室（霧箱、液状化実験、津波実験）

ア 日 時 令和6年7月6日（土）、8月25日（日）

イ 場 所 伝承館研修室

ウ 参加者 それぞれ20～30名程度の参加があった。

(3) ふたば・いいたて民俗芸能大集合

企画展関連イベントとして各団体に依頼して、伝承館内で実際に舞などを披露してもらった。参加団体は上記の団体以外にも双葉8町村で活動している太鼓団体にも声をかけ、2日間で計15団体が伝統芸能を披露した。

ア 日 時 令和7年2月22日（土） 11時～14時30分
令和7年2月23日（日） 11時～14時

イ 場 所 伝承館エントランス

3節 出張展示

1. フランス出張展示

伝承館では初となる海外展示をフランス・モンベリアル市で実施した。同市のサイエンスパビリオンとの連携・協力の下に実現した。福島が経験した東日本大震災について時系列に写真・文字・年表で解説したほか、実物資料も交えて展示した。

展示の準備にあたっては日仏でデータや資料をやりとりしながら作業にあたった。令和5年度中にフランス側の担当者が伝承館を訪問し、その後の作業を受けて令和6年6月に伝承館の学芸員がフランスを訪問した。

また、令和6年12月に館長、語り部2名、学芸員1名が現地を訪問した。訪問時には記者会見、モンベリアル工科大学での講演及び語り部、サイエンスパビリオンでの語り部を実施した。合わせてモンベリアル市役所とブルゴーニュ＝フランシュ＝コンテ地域圏役所を訪問し、歓迎を受けた。開会セレモニーにはモンベリアル市、地域圏等の他に在フランス日本大使館からも出席があった。

ア 期間 令和6年12月14日（土）～令和7年6月30日（月）

イ 会場 Pavillion de Science 企画展示室

ウ 会場の風景



エ 関連イベント

- (ア) モンベリアル工科大学講演会 令和6年12月13日（金）
高村館長、伝承館学芸員による講演と語り部2名による語りをモンベリアル工科大学の学生を対象に実施した。
- (イ) モンベリアル市役所訪問 令和6年12月14日（土）
日本からの訪問団（館長、学芸員、語り部、県職員）がモンベリアル市役所を訪問し、歓迎セレモニーを受けた。市長及び高村館長のスピーチがあった。
- (ウ) ブルゴーニュ＝フランシュ＝コンテ地域圏役所訪問
令和6年12月14日（土）
日本からの訪問団が同地域圏役所を訪問し、歓迎を受けた。
- (エ) 開会セレモニー及び語り部 令和6年12月14日（土）
サイエンスパビリオンにて展示の開会セレモニーが行われた。日本からの訪問団、モンベリアル市、ブルゴーニュ＝フランシュ＝コンテ地域圏役所、在フランス日本大使館等からの出席があった。開会セレモニーでは高村館長及び伝承館学芸員がスピーチを行い、セレモニー終了後に語り部2名による語りが行われた。



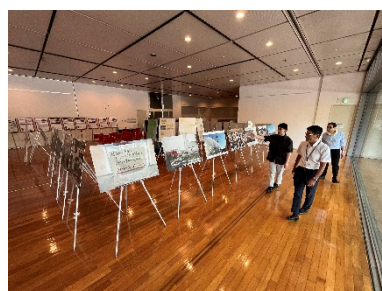
2. 墨田区防災フェア出張展

東日本大震災と原発事故に関する被災や復興状況の展示や、首都直下地震などを想定した防災に関するパネル、原発事故で避難を経験した「語り部」のパネル・動画により、見学者の防災意識の醸成に役立つことを目的とした。

ア 期間 令和6年8月26日（月）～9月1日（日）

イ 会場 墨田区役所

ウ 展示風景



3. 日本排尿機能学会出張展

日本排尿機能学会と連携し、ビックパレットふくしまで開催された同学会の研究発表大会において震災と復興を伝える特別展を開催した。写真や実物資料に加え、福島県内の震災伝承施設を紹介するパネルを展示した。

ア 期間 令和6年9月5日（木）～9月7日（土）

イ 会場 ビックパレットふくしま

4. 消防博物館パネル展

東京都の消防博物館（東京消防庁消防防災資料センター）で出張展示を実施した。当時の東京消防庁の対応や被災地の現状をパネルや実物資料で伝えた。

ア 期間 令和7年1月21日（火）～3月23日（日）

イ 会場 消防博物館 1階展示コーナー

ウ 展示風景



4節 エントランス展示

1. 大東建託賃貸住宅コンペ模型展

大東建託が双葉町を舞台とした賃貸住宅コンペを実施し、その模型作品を展示した。

ア 期間 令和6年4月15日（月）～5月13日（月）

イ 展示風景

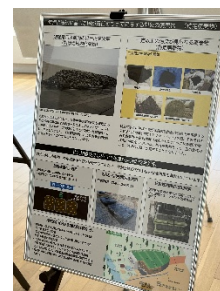


2. リプルンふくしまパネル展

津波で流された車両や建物が散乱する様子、国が処分場を整備するまでの経緯と処分状況などをパネルで振り返った。

ア 期間 令和6年4月26日（金）～5月26日（日）

イ 展示風景

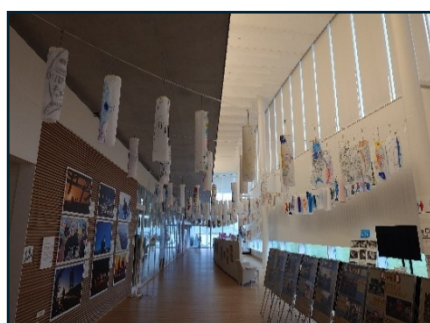


3. 鯉アートのぼり展

福島大学 渡邊晃一教授が 2011 年から制作・収集している復興祈念の鯉アートのぼりを、双葉郡で有名な鯉に代えた鯉アートのぼりとして展示を行った。制作は双葉町や浪江町などの双葉郡の住民や避難先の住民に描いてもらったものを主に展示した。展示期間中も制作・収集を行っており、最終的には約 300 枚の鯉アートのぼりを収集・展示した。展示はのぼりだけではなく、福島大学の学生が作成した鯉モチーフのダルマや版画なども併せて展示した。

ア 期間 令和 6 年 5 月 1 日（水）～ 7 月 10 日（水）
令和 7 年 1 月 11 日（土）～ 5 月 31 日（土）

イ 展示風景



4. 能登半島地震報道写真展

令和 6 年 1 月 1 日（月）に発生した能登半島地震から半年の節目に合わせた企画。倒壊した家屋や大規模火災で焼け落ちた建物の空撮写真を交えるほか、被災された方のさまざまな表情を伝え、地震の規模や被害状況を説明することで、災害は身近な地域でも起こると感じてもらう展示とした。

ア 期間 令和 6 年 7 月 3 日（水）～ 7 月 31 日（水）

イ 展示風景



5. 復興知ポスター展

イノベ機構主催の「復興知」でポスター発表を行った成果物をパネルにして展示した。

ア 期間 令和 6 年 8 月 30 日（金）～ 12 月 22 日（日）

イ 展示風景



6. 福島学カレッジ成果展示

「福島学カレッジ」表現コースで学んだ県内外の中高生 10 名によるグループ展。震災を経験した福島を自分自身の視点で捉え、自由な方法で表現した作品を展示した。

ア 期間 令和6年9月21日（土）～9月29日（日）

令和7年2月15日（土）～2月20日（木）

イ 展示風景



7. 林野庁パネル展示

森林内の放射性物質の影響、森林除染などについて、現状や課題といったことがわかりやすく解説されたパネル30枚や林業に関する動画、顔出しパネル、触ることができる端材として福島産のヒノキのかんなけずりが展示された。

ア 期間 令和6年12月23日（月）～令和7年1月22日（水）

イ 展示風景



8. 移住ドラマ「風のふく島」パネル展

ふくしま 12 市町村移住支援センターが制作協力した移住ドラマ「風のふく島」を紹介するパネル等の展示を行った。

ア 期間 令和7年1月4日（土）～5月6日（火）

イ 展示風景



9. UR都市機構フォトコンテストパネル展

「UR都市機構フォトコンテスト 2024」の受賞作品と福島県応募作品を展示し、東北そして福島県の今を紹介する機会として開催した。

ア 期間 令和7年1月9日（木）～2月17日（月）

イ 展示風景



10. ハマカルアート・サテライト展示

「よりそう」をテーマに、3人のアーティストが福島県沿岸部をリサーチし、地域に入り込み、それぞれの解釈で仕上げた作品を展示した。

ア 期間 令和7年1月11日（土）～2月28日（金）

イ 展示風景



11. 阪神・淡路大震災パネル展

人と防災未来センターの協力を得て、1月17日（金）で発災から30年となる阪神・淡路大震災に併せた展示を行った。

ア 期間 令和7年1月15日（水）～1月31日（金）

イ 展示風景

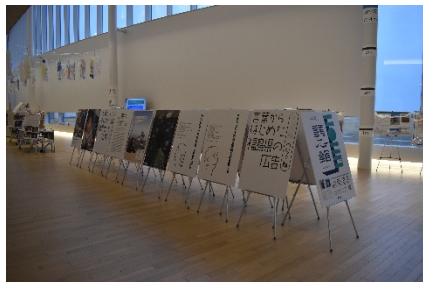


12. 誇心館パネル展

福島県の魅力や正確な情報を発信する取り組みとして制作されたポスターや動画、ノベルティーなどのクリエイティブ作品を展示し、福島県の「魅力」や「今（現在の様子）」を多角的に感じてもらう内容として展示した。

ア 期間 令和7年3月5日（水）～3月31日（月）

イ 展示風景



13. 未来への手紙パネル展

東日本大震災・原発事故を知らない世代へ記憶や教訓をつないでいくことを目的とし、県内の中学生に震災学習で学んだことや素直な思いを手紙として募集し、展示した。

ア 期間 令和7年3月8日（土）～4月11日（金）

3 章 資料収集・保存

1節 資料収集・保存・収蔵

「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設」に関する資料収集ガイドライン」に基づき、資料の収集・保存を実施した。

1. 資料収集

(1) 収集点数（令和7年3月31日現在）

	資料形態	令和5年度まで	令和6年度	計
一次資料	モノ	9,647	1,393	11,040
	紙	80,717	5,400	86,117
	写真	115,347	947	116,294
	映像・音声	5,113	53	5,166
二次資料	図書・雑誌	3,319	442	3,761
	冊子・会報	23,171	2,214	25,385
	新聞	52,746	107	52,853
	視聴覚資料	538	43	581
合計		290,773	10,599	301,372
備考		(その他 175 点含む)		(その他 175 点含む)

※ 「その他」は、デジタルデータであるものの、拡張子が特殊といった理由で、PC上で中身を確認できなかったもの。

(2) 主な収集物（令和6年度）

ア 一次資料

(ア) モノ

- ・ふたばいんふお内からのTシャツやパネル、タブレットなど
- ・震災後そのまま残されていた賞味期限の切れた商品
- ・モニタリングポスト
- ・警戒区域に残っていた人がカレンダーに残した記録
- ・震災復興のチャリティイベントで落札した人形
- ・双葉町のだるまや津波で大きく曲がったガードレール
- ・ドラマ「風のふく島」の出演者台本やメッセージ

震災前の双葉ダルマ市で使用されていた巨大ダルマの収集・運搬（双葉町）	ふたばいんふお内で使用していた浜通りの地図模型（富岡町）
	

(イ) 紙

- ・浜通りを中心とした行事やイベントなどのチラシ
- ・商品紹介の紙
- ・自治体からのヨウ素剤に関するお知らせ
- ・帰還困難区域への特別通過通行証

(ウ) 写真

- ・富岡町内にあった食品販売店の調査写真
- ・一時帰宅時の浪江町内や請戸地区周辺の写真
- ・伝統芸能の披露をしている時の写真

葛尾村での盆踊りが行われた時の写真 (葛尾村)	双葉ダルマ市でのダルマ引きなどの写真 (双葉町)
	

(エ) 映像・音声

- ・企画展「長期避難と祭り」にて収集した証言映像
- ・ふたばいんふお関係者への証言収集
- ・伝承館登録語り部の語り映像
- ・福島県立双葉高等学校 歌集 未開封 CD

イ 二次資料

(ア) 図書・雑誌

- ・2024 年 東日本大震災 ふくしまの学びを日本・世界へ 報告書
- ・石巻市 東日本大震災復興記録誌
- ・ぼくのひまわりおじさん
- ・大字誌 両竹 6

(イ) 冊子・会報

- ・各自治体の広報誌
- ・企画展 長期避難と祭り～伝統文化がつなぐ地域住民の絆～【記録集】
- ・THE FUTURE TIMES 01 創刊号 2011 winter

(ウ) 新聞

- ・常磐線全線開通に関する地元新聞紙の号外

(エ) 視聴覚資料

- ・証言記録 東日本大震災 第 27 回 福島県いわき市 DVD
- ・かぼちゃ饅頭テーマソング おばあちゃんのかぼちゃまんじゅう CD

2. 証言収集

東日本大震災と原子力災害に関する様々な体験や想いを後世に残すことを目的に、令和5年3月11日（土）から、被災体験を綴った手記や日記などを広く募集する取組みを開始した。なお、被災体験が書かれた書籍、音声・映像記録も対象としている。募集期限は設けず、長期的に収集していく予定である。

令和6年度は11件、計11人の方の証言収集を行った。

資料収集チラシ



証言収集チラシ



3. 資料活用

震災と原子力災害の記録と経験を伝えるため、伝承館が所蔵する資料や震災関連パネルの貸し出しを行った。

ア 福島市消防本部

(ア) 期間 令和6年4月30日

(イ) 貸出資料 電子データ

イ 一般社団法人 Nippon AWAKES

(ア) 期間 令和6年7月25日～10月15日

(イ) 貸出資料 電子データ

ウ 福島県芸術祭相双地区実行委員会

(ア) 期間 令和6年8月31日～9月4日

(イ) 貸出資料 写真展示パネル、時層地図モニター

エ (株) ジェイアール東日本企画

(ア) 期間 令和6年10月20日～11月10日

- (イ) 貸出資料 写真展示パネル、時層地図モニター
オ 独立行政法人都市再生機構
- (ア) 期間 令和6年12月18日～令和7年4月14日
- (イ) 貸出資料 実物資料、企画展制作パネル
カ (株)朝日新聞社
- (ア) 期間 令和7年2月1日
- (イ) 貸出資料 電子データ
キ (株)福島映像企画
- (ア) 期間 令和7年2月19日～2月22日
- (イ) 貸出資料 企画展制作資料
ク 成田市公津の杜コミュニティセンター
- (ア) 期間 令和7年2月24日～3月14日
- (イ) 貸出資料 写真展示パネル

2節 資料閲覧室

1. 図書資料閲覧サービス

資料閲覧室には図書類を約 2,200 冊配架している。このうち、重複を除いた図書の総数（版違いを含む）は 1,984 冊である。これらの図書は開架棚に配架され、利用者が自由に閲覧できる。

現在のところ、資料閲覧室では貸し出しサービス、複写サービスおよびレファレンスサービスは提供していない。一方で Web-OPAC（オンライン蔵書目録）を整備し、インターネット上から蔵書検索ができる。

2. 収蔵図書の内容

資料収集の当初から震災記録誌、字誌、地域史、学術調査報告など流通量が少ないローカルな図書（例えば関係者にのみ配布された図書など）の収集に力を入れてきた。また、令和3年度に企画展「絵本で見る東日本大震災」を開催する際に集めた絵本なども配架している。

3. 国立国会図書館データベース「ひなぎく」との連携

令和6年1月12日（金）から国立国会図書館東日本大震災アーカイブ「ひなぎく」と連携を開始し、当館が所蔵する震災や原子力災害に関する図書、自治体の記録誌等約 1,900 タイトルが検索できるようになった。

連携により、当館が所蔵する図書が、これまで以上に多くの利用者の目に触れ、防災・減災対策や防災教育などに活用されることが期待される。

4. 資料閲覧室の移動

資料閲覧室と研究室の部屋を入れ替えた。また、一部図書をエントランスで閲覧できるよう整備した。今後も来館者の利便性向上へ向けて資料閲覧室の運用方法を整備していく。



資料閲覧室内



エントランス

4章 語り部

1 節 館内語り部講話

1. 館内語り部講話

東日本大震災及び原子力災害を経験した地域住民の方の生の声を聴くことができる「語り部講話」を館内で開催している。伝承館に登録している語り部が日替わりで担当しており、入館券をお持ちの方であればどなたでも聞ける（各回先着 27 席）。

展示エリア内のワークショップスペースにて、休館日を除く毎日、1 日 4 回（各回 40 分間）開催している。

館内語り部講話時間

第 1 回	10 : 00～10 : 40
第 2 回	11 : 15～11 : 55
第 3 回	13 : 15～13 : 55
第 4 回	14 : 30～15 : 10

2. 館内語り部登録人数及び実績

館内語り部には、35 名が登録している（令和 7 年 3 月末現在）。

令和 6 年度は、1,228 回開催し、約 11,817 人が聴講した。

（各語り部のテーマ一覧）

紙芝居『菜の花物語』（南相馬市）
あの日から 13 年間の久之浜町 そしてこれからは…（いわき市）
震災経験とその後の活動（南相馬市）
福島第一原発事故における病院避難について （東京都※本人の被災体験ではなく聞き取りした内容です）
震災当日の行動と教訓及び復興事業について（いわき市）
「当たり前」はない（大熊町）
自分の命を守る（いわき市）
震災紙芝居（浪江町）…（1）
長い避難生活を支えた励ましの数々（富岡町）

震災・原発事故を語る（双葉町）
東日本大震災と避難生活の実態（浪江町）
変わりゆくふるさと それでも前を向いて（双葉町）
東日本大震災—あの日から 14 年が過ぎて（南相馬市）
あの日を 忘れない それが備えの第一歩 ～震災の経験から伝えたいこと～（南相馬市）
東日本大震災 娘との日々（富岡町）
震災、避難経験を振り返って（大熊町）
防災意識を高めよう。みんなと、自分を！（南相馬市）
原発から 25 キロに住む 1 人として（南相馬市）
震災・原発事故から復興へ（大熊町）
震災後の 2 日間とその後（大熊町）
震災発生から全町避難を振り返って（富岡町）
『残照』～震災の記憶～（相馬市）
震災紙芝居（浪江町）…（2）
置き去りにされた動物（浪江町）
復興を支える 人との繋がり（富岡町）
伝統文化存続の危機と伝承（双葉町）
ふるさとで暮らす（大熊町）

生きのびるために（双葉町）
震災・避難・現在の歩み（富岡町）
震災時の体験と伝えたいこと（大熊町）
震災と私 ～その時、私の周りで起きたこと～（双葉町）
東日本大震災原発事故により避難した体験を ダンボールアートを通して語り伝える（富岡町）
東日本大震災から考える防災と社会課題（大熊町）
双葉の子どもたち（双葉町）
私の震災体験とそれから「仙台港での大津波、多賀城の職場、 相馬の実家、そして大切な家族」（相馬市）
当時 11 歳にとっての東日本大震災（富岡町）
役場職員 震災直後の 7 日間（浪江町）

3. 館内語り部を対象とした研修

館内語り部の技術向上と交流を目的として語り部研修を 2 回実施した。

○第 1 回 令和 6 年 8 月 24 日（土）、26 日（月）

参加者：23 名

場 所：伝承館研修室

講 師：福島大学食農学類農業経営コース 小山 良太 教授
「福島県の農作物はなぜ安全になったのか？」

○第 2 回 令和 7 年 2 月 24 日（月・祝）

参加者：25 名

場 所：伝承館研修室・震災遺構請戸小学校

講師：①講義

東日本大震災・原子力災害伝承館 館長 高村 昇
「放射線被ばくと健康影響」

②請戸小学校見学

震災当時請戸小学校教務主任 佐藤 信一 先生

2 節 館外での語り部講話、交流

1. 沖縄県と福島県との語り部交流（福島県空港交流課事業）

日時：令和6年11月5日（火）～7日（木）

場所：沖縄県平和祈念資料館

福島県空港交流課主催事業で、沖縄県と福島県との語り部交流が行われた。福島県からは当館若手職員と、NPO「富岡町 3.11 を語る会」の代表、「浪江まち物語つたえ隊」の語り部の計3名が参加した。5日と7日は沖縄県平和祈念資料館やひめゆり平和祈念資料館等を見学し、6日は福島と沖縄の語り部講話を互いに聴講したのち、意見交換を行った。

沖縄県と福島県との語り部交流
（沖縄県平和祈念資料館）



2. 3.11 メモリアルイベントでのトークセッション

日時：令和7年3月8日（土）

場所：伝承館

伝承館で行われた3.11メモリアルイベントでは、岩手県と福島県（富岡町）で震災伝承を続ける若い世代の2名がそれぞれの視点・考えについて語りあった。

3.11 メモリアルイベントでのトークセッション（伝承館）



5章 研修

1 節 一般研修

伝承館では、展示見学に加え、研修プログラムを提供しており、福島県で起きた未曾有の複合災害の事実や復興の現状・課題を体感することができる。

1. 研修語り部講話

震災を経験した語り部から、当時の不安や悲しみ、災害への備え、未来に向けての思いなどを聞く。

2. フィールドワーク

双葉町と浪江町をバスで巡り、同乗するフィールドパートナー（ガイド）の説明を聞きながら被災地の現状を見学する。

3. ワークショップ

研修を通して知ったこと、感じたことを振り返り、参加者の間で共有する。

※ ワークショップは、フィールドワークや研修語り部講話と併せて申込む「フルパッケージ」の場合に限り受講できるプログラム。

語り部講話



フィールドワーク



ワークショップ



4. 研修料金

				一般	小中高生
入館料	個人（1人あたり）			600 円	300 円
※減免制度あり	団体入館料（1人あたり）			480 円	240 円
研修受講料 （1人あたり）	フルパッケージ （4時間～）	ガイダンス （15分） 展示見学 （60分）	フィールドワーク （60分）	3,000 円	1,500 円
			研修語り部講話 （40分）		
			ワークショップ （60分）		
	選択受講 ※複数選択可	展示見学 （60分）	フィールドワーク （60分）	1,000 円	500 円
			研修語り部講話 （40分）	1,000 円	500 円

※ その他、研修料金等の詳細な料金体系については、東日本大震災・原子力災害伝承館HP（<https://www.fipo.or.jp/lore/>）を参照。

5. 一般研修参加者数

	令和6年度合計		開館以降累計	
	団体数	人数	団体数	人数
全体	346	14,512	1,213	52,804
学校団体	111	8,186	470	34,055
一般団体	235	6,326	743	18,749

2節 専門研修

伝承館では、東日本大震災と原子力災害について、より詳しく学ぶことができる専門研修を実施している。

1. 専門講座

館長及び上級研究員による各専門分野に関する専門講座を実施した。

(1) 講師と専門分野

講師	分野
館長 高村昇	放射線被ばくと健康被害、リスクコミュニケーション
上級研究員 安田仲宏	原子力防災と放射線
上級研究員 関谷直也	風評被害、東日本大震災の社会的影響、原子力災害の避難、災害流言、パニック、災害情報、津波からの避難、水害からの避難
上級研究員 開沼博	福島復興・廃炉の社会科学、ボードゲーム型復興・廃炉体験で学ぶ福島学

(2) 実績

受講者数 126 名（6 団体）

（内訳）

学校関係 56 名（2 団体）、その他（研究機関、企業等）70 名（4 団体）

2. 上級・常任研究員の企画による研修プログラム

(1) 福島学カレッジ

- ・表現コース（令和6年7月～令和7年3月 全4回）
- ・研究コース（令和6年10月～令和7年1月 全4回）

開沼上級研究員等が講師となり、中高生を対象に、「福島の研究」を実践する機会を提供した。県内外から「表現コース」に10名、「研究コース」に16名の合計26名の中高生が参加した。

東日本大震災・原子力災害伝承館の展示見学や講義、フィールドワークを通じて震災・原子力災害への学びを深め、大学教授や伝承館の研究員の支援を受けて、作品のテーマや研究計画を立案し、作品展示や研究発表を実施した。

<表現コース プログラム>

第1回 7/29・30・31
 現地見学バスツアー/自己表現ワークショップ①
 第2回 8/16・17・18
 福島と自分を繋ぐワークショップ/自己表現ワークショップ②
 第3回 9/21・22
 Work in Progress 展(中間発表とトークセッション)
 第4回 3/19・20
 成果発表グループ展「福島とわたし展」

<研究コース プログラム>

第1回 10/19・20
 関心可視化ワークショップ
 第2回 11/23・24
 研究事例紹介、研究手法の演習/研究計画作成ワークショップ
 第3回 12/26・27・28
 東京研修(東京大学・霞ヶ関などでのワークショップ)
 第4回 1/25・26
 研究成果報告会・プレゼンテーション・フィードバック

(2) 自治体職員向け原子力研修講座(令和7年1月27日(月)・28日(火))

安田上級研究員が企画し、一般財団法人日本原子力文化財団とのタイアップ開催。全国の自治体職員を対象に、16自治体から32名が参加した。

27日は、東日本大震災・原子力災害伝承館の展示見学や語り部講話、フィールドワークといった研修プログラムを通じて震災・原子力災害への学びを深めた。

28日は、高村館長と安田上級研究員が講師となり、放射線や原子力防災についての講演を実施。講演後には安田上級研究員が進行役となり、避難計画の実効性に関して原子力防災チェックリストをもとにグループワークを実施した。

1/27 東日本大震災・原子力災害伝承館での研修の様子



1/28 J ヴィレッジ 光の間での講演の様子



(3) 消防職員向け原子力研修（令和7年2月19日（水）・20日（木）・21日（金））

安田上級研究員が企画し、一般財団法人日本原子力文化財団の協力で開催。福井県敦賀美方消防組合10名が参加した。

2日目は、伝承館見学とフィールドワーク、語り部講話などの伝承館研修プログラム、双葉消防本部の講話を実施。

3日目に安田上級研究員によるサーベイメータの実習などを実施した。

※1日目は公共交通機関の大幅な遅延が生じ、講義は中止となった。

2/20 東日本大震災・原子力災害伝承館での研修の様子



2/21 サーベイメータの実習の様子



6章 調査・研究

1 節 概要

1. 目的及びミッション

伝承館では、「調査・研究事業」を行っている。蓄積した研究成果については、伝承館の「研修」や「展示・プレゼンテーション」に反映させることを通じ、多くの方へ福島における原子力災害の教訓や現状を発信するとともに、収集した資料の体系化を図ることにより、福島の経験を後世に継承する「知の交流拠点」としての役割を果たしていく。

調査・研究事業の目的は復興を担う人材の育成を行い、被災地の復興を加速させるとともに、今後発生することが否定できない国内外の災害に対する防災・減災に寄与することである。

この目的を達成するため、3つのミッションを設定し、研究事業を推進している。

【目的を達成するためのミッション】

1 教訓の体系化

伝承館では、複合災害、特に原子力災害とそこからの復興過程に関する実態に係る資料を収集し、調査・研究を俯瞰的に行い体系化し、そこから得られる教訓の抽出を通じ、復興及び減災に寄与します。

2 教訓の発信

伝承館に蓄積・体系化された教訓を広く世界に還元するため、積極的な情報発信や調査・研究成果をもとにした専門的研修プログラムの構築や展示・プレゼンテーション事業への反映等広く発信します。

3 研究者の育成

大規模災害、広域災害・複合災害、特に原子力災害研究と復興研究の先駆者として、新たな知の体系化と、その学術的価値の確立を先導していく研究者、防災、減災、復興を担う人材を育成するとともに、広く福島に関心を抱く方々が集い学ぶことのできる知の拠点としての役割を果たします。

2. 研究体制（令和7年3月末時点）

伝承館における調査・研究事業は、これまで様々な分野で福島に係る研究を行ってきた館長及び上級研究員に常任研究員を加えた「文理融合」の研究体制により進めている。常任研究員に対しては館長・上級研究員がアドバイザーとなり、研究等のサポート・実績の管理を行っている。

また、全国の大学等の研究機関や国際機関、地元自治体、企業等との共同研究やシンポジウム開催等の連携を通じ、福島に想いを寄せる方々が集う拠点としての役割を果たしている。

- (1) 館長：1名
 - ・高村昇（令和2年度～）
長崎大学原爆後障害医療研究所 国際保健医療福祉学研究分野 教授
- (2) 上級研究員：3名
 - ・安田仲宏（令和2年度～）
福井大学附属国際原子力工学研究所 原子力災害・危機管理部門 部門長
 - ・関谷直也（上級研究員）（令和2年度～）
東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター長 教授
 - ・開沼博（上級研究員）（令和2年度～）
東京大学大学院情報学環 准教授
- (3) 常任研究員：4名
- (4) 客員研究員：27名

2節 常任研究員の取組

■葛西優香 KASAI, Yuka（令和4年4月～令和7年3月）

1. 研究キーワード

地域、まちづくり、防災、地区防災計画、伝統芸能、継承、災害社会学

2. 所属学会

日本災害情報学会、日本災害復興学会、日本自然災害学会、地域安全学会、
日本社会心理学会、地区防災計画学会、日本生活学会

3. 令和6年度の調査・研究

3.1. 研究テーマ

復興過程のまちづくり～祭からの発展～

3.2. 概要

一度、町民全員が一斉避難を強いられた浪江町において、地域のコミュニティが何をきっかけとして戻り、その際に機能するのは何かさらにどのようにまちづくりが発展していくのかという問題意識を持ち、浪江町において調査を継続した。2023年度までの調査で、住民は、神社を再建し、そこで行われる祭や伝統芸能の取り組みを復活させ、住民同士のつながりの復活に向けて取り組み続けていることが明らかとなった。

2024年度は、きっかけとなった（1）祭りと地域のつながりについて地域を広げて調査し、さらに、まちづくりの発展として各地域における（2）防災活動（自主防災組織の検討、地区防災計画の作成など）について発展過程を調査し、祭りを基軸とした地域づくりから住民が主体となって地区防災計画作成などへと進展する過程の記録を続けている。

3.3. 研究内容

浪江町を主なフィールドとし、各芸能保存会の活動現場や祭の実施場所における聞き取り調査、参与観察、アクションリサーチを継続的に実施した。令和4年度から継続し、延べおよそ130名の住民に調査を行った。震災前から継続的に活動に関わっている住民、震災後に関わり始めた住民、関わらなくなった住民などそれぞれの立場の住民に対して、祭や伝統芸能との関わり方を問うた。さらに祭や伝統芸能を通じた活動が住民の生活にいかにつながっているかを把握するため、各地域で進み始めている地区防災計画作成の過程に関わり、作成過程における住民の発言や町役場、福島県庁、企業との連携内容など多様な主体者のまちづくりへの関わり方を記録した。祭から動き出した住民の活動を観察し、各地域の歴史的文脈の特徴なども捉えながら、地域ごとのまちづくり過程の記録を今後も継続して行う。

3.4. 研究成果

(1) 祭りと地域のつながり

祭りや伝統芸能の継承に関わる団体の代表者が集まり、意見交換会を2024年8月、2025年2月に実施し、互いの活動状況を知り合うことで、各団体が変わらずに守ってきたことを徐々に変化させ、新しいメンバーの加入を促進する動きが見られた。具体的には、町内の限られた地区の出身者のみで構成することを守ってきたが、それでは、メンバーの新規加入が見込めず、枠を広げ、町内在住であれば加入を受け入れるという住民の決断が見られた。団体、芸能を「守る」ことを優先にする住民の意志であると捉える。何を守り、何を変化させ今後も活動を継続していくのか調査を続ける。

(2) 防災活動（自主防災組織の検討、地区防災計画の作成など）

祭や伝統芸能に関わる住民に対して、聞き取り調査と参与観察を継続することにより、震災前から根差す祭や伝統芸能を介して住民が集まり、対話を繰り返して、互いの特徴を知り、有事の際への対応策としての地区防災計画作成へとまちづくりが発展していく過程が見られた。作成過程においても「住民」と一言で提示しても詳細に迫れば、避難先居住者、避難先と震災前に居住していた住居を通う住民、移住者など多様な背景を持っている。日々の生活における町との関わりが一定でない中で、情報伝達手段の検討や個別避難計画への反映など福島県双葉郡浪江町ならではの事情に対する対応策が計画へと反映された。さらに、一つの地域で実施された地区防災計画作成が町内他地域や双葉郡広野町へと展開した。作成に関わる主体者や進め方の違い、祭や伝統芸能活動との関わりなど各地域の特色を捉えながら、まちづくりを行っている過程を記録することができ、今後

の福島県双葉郡の各町、各地域におけるまちづくりを進める上での知見が得られた。

4. 令和6年度研究の全体像に対する認識・評価

(1) 祭りと地域のつながり

令和4年から引き続き調査を行ってきた結果、祭と伝統芸能の機能を言語化し、令和6年度の研究活動、冊子作成、企画展実施へとつながった。企画展では、福島県双葉郡の25団体にご協力いただき、各団体の震災前から震災直後、現在に至る活動過程、代表者への聞き取り内容、さらに団体ごとの交流を図り、今後の活動に向けた連携体制について議論を行った意見交換会の結果を展示し、震災後の住民活動の現状を伝承館から発信することができた。伝承館の学芸員梅津拓斗氏が筆頭となり、各団体の資料収集を推進し、各課との連携の上、企画展が実現した。本企画展の成果は約10社のメディアへの掲載へとつながった。さらに、これまでの伝統芸能継承団体への聞き取り調査の結果を「伝統芸能保存会の活動—福島県双葉郡八町村からの想い」という一冊の冊子にまとめることができた。今年度、継続して行ってきた研究結果を今後、論文へまとめ、学会誌への投稿、学会における口頭発表を行う予定である。研究結果を発表、文章化することが重要であると認識しており、今後の研究活動の課題として取り組む。

5. 成果・活動

(1) 外部研究費の獲得状況

- ・日本自然災害学会・令和4年度第2回災害調査補助制度「福島県双葉郡の神社・民俗芸能の再興現状調査」〔葛西優香〕【継続】

(2) 書籍（単著・分担執筆含む）

- ・葛西優香、伝統芸能保存会の活動—福島県双葉郡八町村からの想い—、東日本大震災・原子力災害伝承館、2025

(3) 論文

（なし）

(4) 口頭発表

- ・葛西優香・関谷直也、「復興過程のまちづくり～祭からの発展～」東日本大震災・原子力災害第3回学術研究集会（2025年3月19日、20日コラッセふくしま）

(5) ポスター発表

（なし）

(6) 社会貢献活動等

1. 出前講義

- ・一般社団法人金町みらい協議会主催 金町防災シンポジウム（福島県双葉郡で得られた知見を他地域絵のまちづくりへと活かすために復興過程のまちづくりの現状を伝えた）パネリスト、テーマ「災害時にも助け合えるまちづく」金町×防災 日々の地域活動から生まれる災害時の助け合い】（2024年6月12日、東京理科大学葛飾キャンパス
- ・樋渡・牛渡地区防災計画作成ファシリテーター 2024年5月12日、2024年7月7日
- ・神奈川県議員・防災士（視察研修）「復興過程のまちづくり」2024年8月6日
- ・福島県立福島高等学校 福島研修授業「今、ここで考える、まちづくりと人生」2024年8月27日
- ・関東学院大学 福島視察「被災地で考える地域防災」2024年9月5日
- ・関東学院大学 地域創生特論（福島）「福島県における東日本大震災・原子力災害の被災状況と防災上の教訓」、2024年10月10日
- ・東京都葛飾区自治町会連合会（視察研修）「防災研究と双葉郡の復興を新たな学びに」2024年10月28日
- ・浪江町 PPP/PFI フォーラム in なみえ パネリスト「公民連携による地域経営」2024年11月3日
- ・特定非営利活動法人ビーンズふくしま・ふくしま母子サポートネット「ママカフェ 防災講座」2024年9月8日、2025年1月18日

2. 講演

- ・浪江町 PPP/PFI フォーラム in なみえ 『『個』が主体のまちづくり』2024年10月3日
- ・令和6年度福島県市町村教育委員会連絡協議会双葉支会教育委員研修会「防災研究と双葉郡の復興を新たな学びに」2024年10月28日
- ・環境省前田研究班成果報告会シンポジウム「新しい復興の形に向き合う：帰還者と移住者の共生的発展を目指して」2025年3月7日

3. 委員

- ・浪江町景観計画策定委員会・委員、2023年11月～
- ・福島県防災基本条例（仮称）検討委員会・委員、2024年3月～
- ・浪江町復興計画【第三次】後期基本計画策定委員会・委員、2024年6月～
- ・公益社団法人 福島相双復興推進機構「大学生観光まちづくりコンテスト2024～福島復興ステージ～」の本選審査員、2024年9月13日
- ・福島県安全で安心な県づくり推進会議委員会・委員、2025年2月～

4. 企画・運営等

- ・2024年度企画展「長期避難と祭り」（企画）
2024年12月21日～2025年3月24日

※2025年4月2日～2025年8月17日（開催期間延長）

・伝統芸能保存団体代表者意見交換会（企画・運営）

2024年8月28日、2025年2月22日

・民俗芸能の実演&「太鼓たたこう」ワークショップ「ふたば・いいたて民俗芸能大集合！」（企画・運営）

2025年2月22日、23日

・ふくしまボイス実行委員会主催（日本災害復興学会、東日本大震災・原子力災害伝承館、人と防災未来センター後援）「第三回ふくしまボイス」（企画・運営）

2025年3月23日

(7) その他

1. メディア掲載

・福島民報「浪江で災害図上訓練 樋渡・牛渡行政区」2024年5月12日

・福島民友「県、浪江の防災支援 双葉郡初地図使い支援考える」2024年5月12日

・ぎょうせいオンライン「地域の助け合いが自分と家族の命を守る第一歩！～「地区防災計画」の作り方～（連載）2023年4月～2024年10月24日

・福島民友「福島芸能復活の歩み」2024年12月22日

・福島民報「双葉の文化守る姿紹介」2024年12月22日

・ふくしまFM「キビタンスマイルラジオ」2024年12月23日

・毎日新聞「双葉の祭り次代につなぐ」2024年12月24日

・NHK「はまなかあいづ TODAY」2025年1月7日

・福島中央テレビ「コジてれ！Chu! 阪神淡路大震災から30年」2025年1月17日

・福島テレビ「テレポートプラス 阪神淡路大震災から30年」2025年1月17日

・福島民報「被災地の民俗芸能」2025年1月23日

・朝日新聞「伝統芸能の継承 被災地再生の絆」2025年1月29日

・朝日新聞「30年 私の被災地支援～『阪神・淡路』を経験―東北に移住し活動」2025年2月17日

・福島テレビ「県政テレビ番組 ふくしま調査隊 【東日本大震災・原子力災害伝承館企画展『長期避難と祭り』開催中】」2025年2月22日

・とうほう・みんなの文化センター ふくしま文化情報「コミュニティ復活を目指す被災地域の奮闘をたどる」、2025年2月25日

・日本テレビ「DayDay.」, 2025年3月11日

・NHK 列島ニュース、2025年3月12日

■ 静岡健人 SHIZUMA, Taketo (令和4年4月～令和7年3月)

1. 研究キーワード：

広域避難者、災害時要配慮者、関心の風化、災害伝承施設、社会心理学

2. 所属学会：

日本リスク学会、日本応用心理学会、日本社会心理学会、日本災害復興学会、
日本災害情報学会、日本自然災害学会、地区防災計画学会、東北都市学会、
日本都市学会

3. 令和6年度の調査・研究

3.1. 研究テーマ

東日本大震災・原子力災害に対する関心の現状に関する調査・検討

3.2. 概要

東日本大震災から10年以上が経過し、福島県は復興に向けて前進しているが、原子力災害は依然として現在進行形であり、処理水や廃炉、風評被害などの課題が残されている。一方で、震災の風化が進み、情報が更新されないことによる「認識の固定化」が深刻化している。

こうした背景を踏まえ、本年度は情報収集の実態を明らかにすることを目的として、(1) 福島県在住者を対象とした調査、および(2) 被災3県と三大都市圏在住者を対象とした調査の2つの研究に取り組んだ。

3.3. 研究内容

【背景】

東日本大震災から10年以上が経過する中で、震災に対する記憶や関心の風化が進みつつある。今後、震災を経験していない世代が増えていくのは自然な流れであるが、現在も原子力災害の影響下にある福島県においては、風化の進行により生じる「認識の固定化」が、特に深刻な問題となっている。こうした事象の背景には、情報が適切に更新されていないという現状があると考えられる。もちろん、情報を更新することによって、かえって事実誤認や風評被害を助長してしまう可能性も否定はできない。とはいえ、いずれの場合においても、起点となるのは「情報の収集」である。ゆえに、情報収集の実態を正確に把握することは、極めて重要な課題である。

そこで、2024年には福島県在住者を対象としたウェブ調査を実施し、その結果をもとに課題を抽出した。続いて、それらの課題を踏まえ、2025年には県内外の住民における情報の受け止め方や傾向の違いを明らかにするため、被災3県（岩手県・宮城県・福島県）及び三大都市圏（東京23区・名古屋市・大阪市）の在住者を対象としたウェブ調査を実施した。

なお本稿では、2024 年調査と 2025 年調査の福島県のデータの分析結果を示す。また各調査は山田修司常任研究員との共同で実施した。

(1) 福島県在住者の情報収集状況

【方法】

2024 年 3 月 13 日から 15 日の 3 日間、株式会社マクロミルのモニターを対象にウェブ調査を実施した。調査対象は、2020 年国勢調査に基づく人口構成に準拠し、性別（男性・女性）、年代（20～60 歳代）、及び福島県内の 3 地域を掛け合わせた割付によって抽出された。

回収数は計 800 人で、その地域別の内訳は、浜通り 197 人、中通り 495 人、会津 108 人であった。また、年代別の内訳は、20 歳代 110 人、30 歳代 139 人、40 歳代 175 人、50 歳代 172 人、60 歳代 204 人であった。

本稿では図 1 に示した全尺度の中から、「Q32：各種情報接触に用いた媒体」の東日本大震災・原子力災害に関する 1 項目と、「Q19：東日本大震災・原子力災害の社会課題に対応すべき課題」を分析に用いた。

(2) 被災 3 県と三大都市圏在住者の情報接触状況

【方法】

2025 年 3 月 12 日～17 日の 6 日間、株式会社クロスマーケティングのモニターを対象にウェブ調査を実施した。調査対象は、2020 年国勢調査に基づく人口構成に準拠し、性別（男性・女性）×年代（20～60 歳代）×8 地域を掛け合わせた割付によって抽出された。

回収数は計 4,000 人で、その地域別の内訳は、福島県 340 人、宮城県 439 人、岩手県 221 人、東京 23 区 A 地域 607 人、東京 23 区 B 地域 560 人、東京 23 区 C 地域 848 人、名古屋市 443 人、大阪市 542 人であった。この内、福島県の年代別の内訳は、20 歳代 47 人、30 歳代 59 人、40 歳代 75 人、50 歳代 73 人、60 歳代 86 人であった。

本稿では図 2 に示した全尺度の中から、「Q33：東日本大震災・原子力災害の社会課題への関心」と、「Q36：東日本大震災・原子力災害の情報への関心」を分析に用いた。



図1 福島県在住者調査の全尺度と質問順序

3.4. 研究成果

(1) 福島県在住者の情報収集状況

年代別に情報源（テレビ、新聞、SNS など）への接触数を分析したところ、20 歳代では「0 種類（20.9%）」の人が多く、一方 50～60 歳代では「5 種類以上（順に、28.5%、27.9%）」の人が多い傾向が見られた。

また、年代別に社会課題（風評払拭、処理水の放出など）に対する当事者意識を持つべき主体（政府、自分自身、わからない、特になしなど）

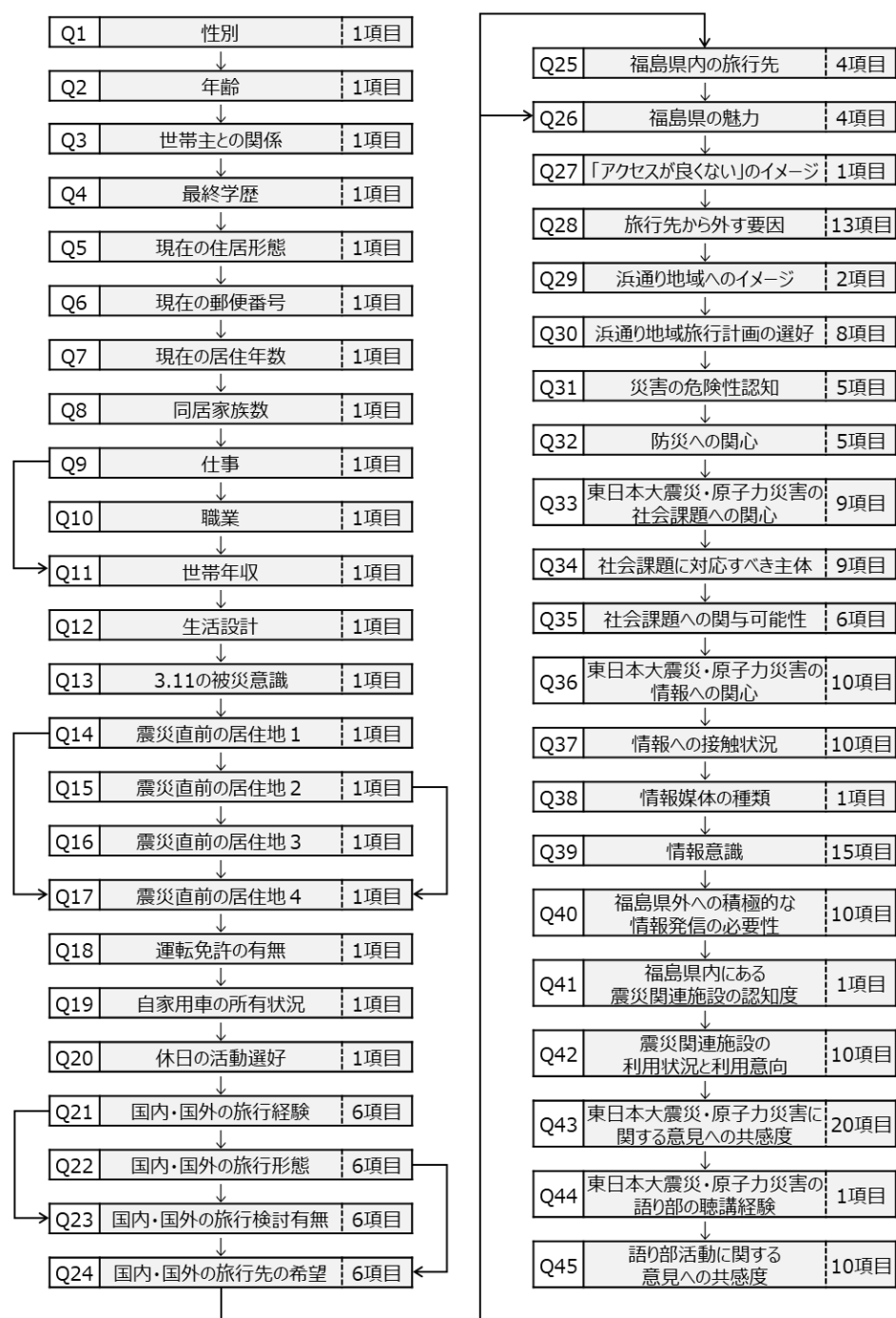


図2 被災3県と三大都市圏在住者調査の全尺度と質問順序

の認識を分析した。各社会課題の当事者意識を持つべき主体として、“わからない” または “特になし” を選択した課題数を合計したところ、20～30 歳代では「10 種類（順に、23.6%、30.9%）」の人が多く、60 歳代では「0 種類（76.0%）」の人が多く傾向が見られた。

(2) 被災3県と三大都市圏在住者の情報接触状況

年代別に、東日本大震災・原子力災害の社会課題への関心（図3）や情報への関心を分析したところ、関心がある（[とても関心がある+関心がある+少し関心がある]）という人は40歳代と60歳代に多く、20～30歳代に少ない傾向が見られた。

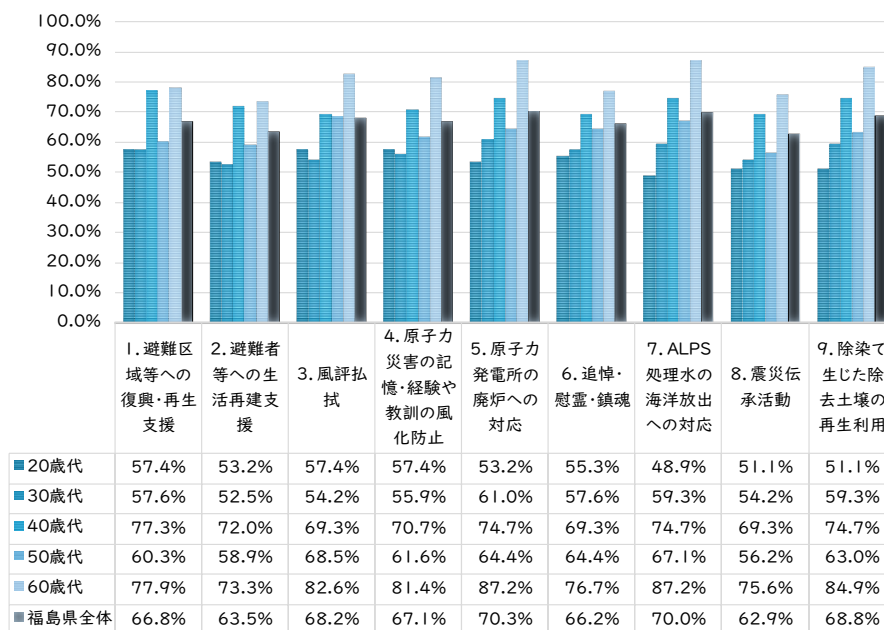


図3 年代別・社会課題への関心（福島県のみ抽出）

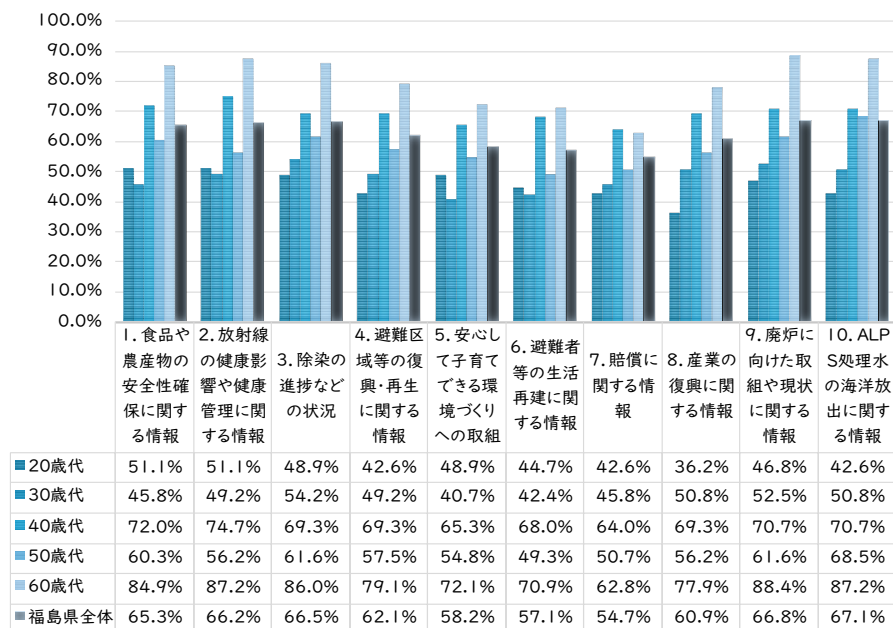


図4 年代別・情報への関心（福島県のみ抽出）

4. 令和6年度研究の全体像に対する認識・評価

本年度は、東日本大震災・原子力災害に関する情報収集の実態を把握することを目的として、3月11日後の時期に大規模なウェブ調査を実施した。その結果、情報接触については、20歳代で少なく、50～60歳代で多い傾向が見られた。また、関心の程度に関しても同様に、20～30歳代で低く、50～60歳代で高い傾向が明らかとなった。これらの分析結果の一部は、査読付論文としてすでに公刊されている（2024年調査）。

今後は、2024年調査及び2025年調査のデータに対して、より詳細な分析を行い、情報接触と心理的要因との関連について検討を進める予定である。

なお、今回のウェブ調査は、調査会社のモニター登録者を対象として実施したものであり、サンプリング・バイアスなどの限界がある。そのため、福島県が毎年実施している県政世論調査など、異なる手法で収集されたデータとの照合・比較を通じて、より信頼性の高い検討を行う必要がある。

また、個別の研究テーマ以外の研究活動においては、多くの裁量が個人に委ねられていることから、研究費の適切な執行に加え、研究代表者として地域社会との連携・調整を図りながら、円滑に研究活動を遂行してきた。さらに、他の常任研究員や外部組織（関西大学、北海道大学、東京大学、福島県、環境省など）との共同研究にも積極的に参画し、意思決定に関与するなど、プロジェクトの中核メンバーとして企画・推進に携わってきた。

加えて、前年度までの研究成果の一部を紹介するパネル展示については、アウトリーチ活動の一環として自ら企画し、他の常任研究員や事務職員と協働して、東日本大震災・原子力災害伝承館のエントランスにて実施した。

5. 成果・活動

(1) 外部研究費の獲得状況

- ・ 「東日本大震災・原子力災害による避難先での避難行動要支援者名簿の作成状況及び課題についての調査」、日本自然災害学会 災害調査補助制度（令和5年度第2回）〔静間健人〕【継続】

(2) 書籍（単著・分担執筆含む）

（なし）

(3) 論文

- ・ 静間健人・永松伸吾・元吉忠寛「岩手釜石市の復興公営住宅入居者の買い物における困りごとに関する調査」、行動科学、63巻2号：83-91、2025【査読有】
- ・ 静間健人・山田修司、東日本大震災・原子力災害に関する情報接触と当事者意識の世代間比較、日本都市学会年報、58巻、2025【査読有】（※掲載決定）

- ・ 山田修司・静間健人、震災伝承施設の利用意向に関連する要因の探索的検討、日本都市学会年報、58 巻、2025【査読有】（※掲載決定）

(4) 口頭発表

- ・ 静間健人・山田修司、東日本大震災・原子力災害に関する情報への接触状況についての調査、日本都市学会第 71 回大会（2024 年 10 月 26 日、石巻魚市場）
- ・ 山田修司・静間健人、震災伝承施設の利用意向に関連する要因の探索的検討、日本都市学会第 71 回大会（2024 年 10 月 27 日、石巻魚市場）
- ・ 静間健人、福島県外避難者に対する情報提供支援に関する研究—ダイジェスト版新聞における情報量の地域バランス—、日本災害情報学会第 29 回学会大会（2024 年 11 月 9 日、朱鷺メッセ）
- ・ 山田修司・静間健人、震災伝承施設は観光対象か？—2024・2025 年ウェブ調査報告—、東日本大震災・原子力災害第 3 回学術研究集会（福島：2025 年 3 月 19 日、コラッセふくしま）
- ・ 鈴木ミチル・杉山高志・安斎聡子・佐藤由紀・杉浦彰子・宮前良平・山田修司・静間健人、震災体験の語りの方と時間の構造—福島県双葉町での語り部と街歩きの事例から—、東日本大震災・原子力災害第 3 回学術研究集会（福島：2025 年 3 月 19 日、コラッセふくしま）
- ・ 静間健人・山田修司、東日本大震災・原子力災害に関する社会課題への人々の関心の風化、東日本大震災・原子力災害第 3 回学術研究集会（福島：2025 年 3 月 19 日、コラッセふくしま）

(5) ポスター発表

- ・ 山田修司・静間健人、モビリティの観点による震災伝承の検討、令和 6 年度環境創造センター成果報告会（2024 年 6 月 25 日、コミュタン福島）
- ・ 静間健人・山田修司、日常生活における東日本大震災・原子力災害についての情報探索行動、令和 6 年度環境創造センター成果報告会（2024 年 6 月 25 日、コミュタン福島）
- ・ 静間健人、フォントの違いが感想に対する印象に及ぼす影響—東日本大震災・原子力災害伝承館に対する感想を用いて—、日本応用心理学会第 90 回大会（2024 年 8 月 27 日、帝塚山大学（オンデマンド））
- ・ 鈴木ミチル・杉山高志・安斎聡子・佐藤由紀・杉浦彰子・宮前良平・山田修司・静間健人、語りの形式の違いによるナラティブの時間の特徴—東日本大震災の被災者の語りを例に—、日本質的心理学会第 21 回大会（2024 年 10 月 19 日、成城大学）
- ・ 静間健人・山田修司、東日本大震災・原子力災害に関する当事者意識と価値観—Web 調査データの分析—、日本リスク学会第 37 回年次大会（2024 年 11 月 16 日、静岡県立大学）

- ・ Tsuchida, S., Kono, K., Sararit, T., Nomoto, S., Wongsuriyanan, C., Urayama, K., Shizuma, T., Panic behaviors in natural disaster, a psychological experiment with VR system in northern Thailand, The Society for Risk Analysis Annual Meeting 2024 (2024 年 12 月 9 日、JW Marriott Austin)

(6) 社会貢献活動等

1. 出前講義

- ・ 「福島の被災と復興の現状」(2024 年 5 月 20 日、神戸学院大学)

(7) その他

1. 学会活動

- ・ 静間健人、日本都市学会第 71 回大会特別セッション「避難と帰還のあいだ」(2024 年 10 月 27 日、石巻魚市場) のコメント
- ・ 土田昭司・竹田宣人・桑垣玲子・堀越秀彦・藤井中・佐田務・浦山郁・静間健人・中山敬太、日本リスク学会 第 37 回年次大会 企画セッション(ワークショップ)「リスクコミュニケーション評価の視点と枠組みについて考える」(2024 年 11 月 17 日、静岡県立大学) のファシリテーター
- ・ 東日本大震災記念 「災害と社会」研究ネットワーク：庶務(2024 年 9 月～現在に至る)

2. 非常勤講師

- ・ 京都文化医療専門学校(担当科目：初めて学ぶ心理学)
- ・ 東洋医療専門学校(担当科目：心理学)
- ・ 梅花女子大学(担当科目：社会調査法)

■山田修司 YAMADA, Shuji (令和 4 年 4 月～令和 7 年 3 月)

1. 研究キーワード

哲学・倫理学、科学社会学・科学技術史、リスク、防災、震災伝承、移動・モビリティ、関係的自律

2. 所属学会

科学技術社会論学会、日本東アジア実学研究会、日本科学哲学会、東北都市学会、日本都市学会、応用哲学会、東北哲学会、東北大学哲学研究会

3. 令和 6 年度の調査・研究

3.1. 研究テーマ

福島における震災伝承の現状と意義に関する調査・検討

3.2. 概要

発災から13年の経過で「避難」の長期・広域化は、地域の復興を展望することを難しくしている。たとえば被災地の居住率をみると、双葉郡8町村に限っても、各町村によって避難指示の対象区域の人口や解除時期などによって差があるもの、令和5（2023）年現在で3割を切っている。こうした状況において、震災伝承には個々人が被災した経験や教訓を伝えるに留まらない、地域の記憶を伝え、地域の復興へつながることが社会的に期待される重要な営みだと考えられる。そこで令和6（2024）年度の調査・研究として、主に昨年度からの継続による震災伝承に注目した（1）福島県内「語り部」調査、（2）福島県内および県外（被災3県と3大都市圏）在住者調査、（3）震災伝承の意義に関する理論的検討、という3つのテーマに取組んだ。

3.3. 研究内容

（1）福島県内「語り部」調査

【背景】震災伝承において中核的な役割を担うとされる震災伝承活動従事者（いわゆる「語り部」）は、高齢化や進学・就職といったライフスタイルの変化や経済的および時間的な余裕の逡巡によって活動の中断や停止が岩手県や宮城県において示唆されている。一方で語り部個人を対象とした質的調査はあるものの、地域での量的調査は十分な蓄積がなされていない。したがって福島県において活動する語り部の現状を把握することは、語り部活動の継続支援の策定などに資すると考えられる。

【方法】福島県内で活動する「語り部」を対象に、令和6（2024）年1月14日から7月30日の期間で、福島県生涯学習課、東日本大震災・原子力災害ふくしま語り部ネットワーク会議、各語り部団体の協力のもと質問票を配布した。質問票にはQRコードを印字して二重回答を防ぎ、ウェブと紙のどちらからでも回答の可能なハイブリッド調査とした。本調査は松永妃都美氏（長崎大学原爆後障害医療研究所／東日本大震災・原子力災害伝承館客員研究員）との共同で実施した。

（2）福島県内および県内外（被災3県と3大都市圏）在住者調査

【背景】震災伝承において施設の意義と役割が、社会的にも学術的にも議論されている。震災伝承施設の利用者を対象とした量的調査には、学習という目的・意図とその効果についてや、施設の評価についての先行研究がある。しかし既利用者ではない人々をも含めて潜在的な利用者として対象とした枠組みによる調査は、十分な研究の蓄積を確認できない。そこで、まず昨年度（2024年）に実施した福島県内在住者を対象としたウェブ調査（2-1）の解析を進め、そこから抽出された課題から展開して県内外（被

災3県と3大都市圏）在住者を対象としたウェブ調査（2-2）を実施した。

（2-1）福島県内在住者調査

【方法】調査会社（株式会社マクロミル）の登録モニターのうち、福島県内居住者20歳～69歳の男女800人を対象に、令和6（2024）年3月13日（水）～3月15日（金）の期間でウェブ調査を実施した。令和2年国勢調査をもとに、性別（男、女）×年代別（20-29、30-39、40-49、50-59、60-69）×地域別（浜通り、中通り、会津）の人口構成比に合わせた割付を行っている。本調査は静間健人常任研究員との共同で実施した。

（2-2）被災3県と3大都市圏在住者調査

【方法】調査会社（株式会社クロス・マーケティング）の登録モニターのうち、福島県、宮城県、岩手県、東京23区、名古屋市、大阪市の在住者20～69歳の男女4,000人を対象に、令和7（2025）年3月12日～3月17日の期間でウェブ調査を実施した。令和2年国勢調査をもとに、性別×年代別×地域別の人口構成に合わせた割付を行っている。本調査は静間健人常任研究員との共同で実施した。

（3）震災伝承の意義に関する理論的検討

震災伝承施設は、ICOM（国際博物館会議）の議論や博物館法の改正（令和5年4月1日施行）などの「ミュージアム」をとりまく状況と無関係でなく、これまでの「災害ミュージアム」をめぐる議論の有効性を検討する必要がある。本調査では、震災伝承を「災害の記憶実践」と措定し、理論的な検討を通じて震災伝承が社会に有する意義を、既往の研究を整理・検討することで提示する。本研究によって震災伝承のよりよい、望ましいあり方への道筋をつけるねらいがある。

3.4. 研究成果

（1）福島県内「語り部」調査

111名に質問票を配布し72名から回答を得た（回収率64.9%）。単純集計から、「現状の語り部活動への満足」を問う項目（4件法）では82.9%が〈満足・どちらかといえば満足〉と、「今後の語り部活動への継続意欲」を問う項目（4件法）が97.2%〈思う・どちらかといえば思う〉という回答を得られた。また「語り部が社会に必要とされている」かどうかを問う項目には98.6%が〈思う・どちらかといえば思う〉といった肯定的な回答を得られた。一方で、44.4%が「語り部活動の継続が困難な経験」をしていた。「語り部活動を続けるために必要なこと」（複数回答）には、「聞いてくれる人」（70.8%）、「語ることのできる場所」（58.3%）、「語りの場を調整してくれる人・団体」（50.0%）が主な回答であった。また「社会的な支援

は適切」（はい／いいえ）と感じているという回答は 63.2%に留まった。得られたデータに統計解析を行い、学会報告および論文執筆・投稿を進めている。

（２－１）福島県内在住者調査

震災伝承関連施設の「認知」について、在住エリア（浜通り・中通り・会津）で分析すると、「いわき震災伝承みらい館」（浜通り）、「環境再生プラザ」「コミュタン福島」（中通り）は施設所在エリアの在住者に知られている傾向がみられた。「どの施設も知らない」という回答は、浜通り在住者以外に多い傾向がみられた。施設の所在エリアへの直近１年間での旅行経験〈有／無〉が施設の認知に関連していた。詳細の分析結果の一部が、学会報告および査読付論文として公刊された。

（２－２）被災３県と３大都市圏在住者調査

上記 2024 年調査から、施設所在地への訪問（旅行）経験に注目して、いわき地域と相双地域への旅行計画の評価に対してコンジョイント分析をおこなった。割付による地域ごとの効用値を表 1 に示す。福島県以外では「宿泊を伴う旅行」と「公共交通機関による移動」を選好する傾向がみとれる。また災害・防災の選好がいずれの地域でも低い傾向がある。ただし旅行の目的（要因 2）の重要度がいずれの地域でも高い傾向があり、単独というよりコンテンツの組み合わせによる効果を重要と思われる。今後、他の質問項目とあわせて詳細な分析を進め、学会報告および論文投稿をおこなう。

表 1 旅行計画へのコンジョイント分析による地域別の効用値

		福島県	岩手県	宮城県	東京23区	名古屋市	大阪市	全体
要因1	いわき地域	0.08	-0.02	0.04	0.03	0.00	0.01	0.02
	相双地域	-0.08	0.02	-0.04	-0.03	0.00	-0.01	-0.02
要因2	自然や動物を楽しむ	0.06	0.00	0.14	0.07	0.11	0.06	0.07
	常磐ものを食べる	0.48	0.18	0.24	0.20	0.22	0.08	0.21
	歴史や文化を知る	-0.15	0.07	-0.04	0.01	-0.04	0.04	-0.01
	災害や防災を学ぶ	-0.39	-0.26	-0.34	-0.27	-0.29	-0.18	-0.28
要因3	一泊二日以上	-0.06	0.21	0.02	0.13	0.20	0.17	0.12
	日帰り	0.06	-0.21	-0.02	-0.13	-0.20	-0.17	-0.12
要因4	公共交通機関	-0.03	0.06	0.03	0.21	0.09	0.17	0.15
	自家用車・レンタカー	0.03	-0.06	-0.03	-0.21	-0.09	-0.17	-0.15
重要度	要因1	13.6%	6.0%	11.5%	4.9%	0.4%	2.8%	5.2%
	要因2	76.1%	54.4%	77.3%	43.5%	55.9%	32.2%	51.5%
	要因3	5.2%	25.7%	2.9%	12.1%	22.7%	21.7%	12.7%
	要因4	5.0%	13.9%	8.3%	39.6%	21.1%	43.2%	30.7%

(3) 震災伝承の意義に関する理論的検討

災害の記憶実践の場所における、震災伝承に使われる語りを含む人やモノなどが「資料」となる契機とその場所がもつべき「公共性＝開放性」や、伝承の担い手間における関係の差異としての「真正性 (authenticity)」と「観客性 (spectatorship)」といった機能の重要性を提示し (図1)、経験的調査との接続を進めている。これについて査読付論文および書籍 (分担執筆) として公刊された。

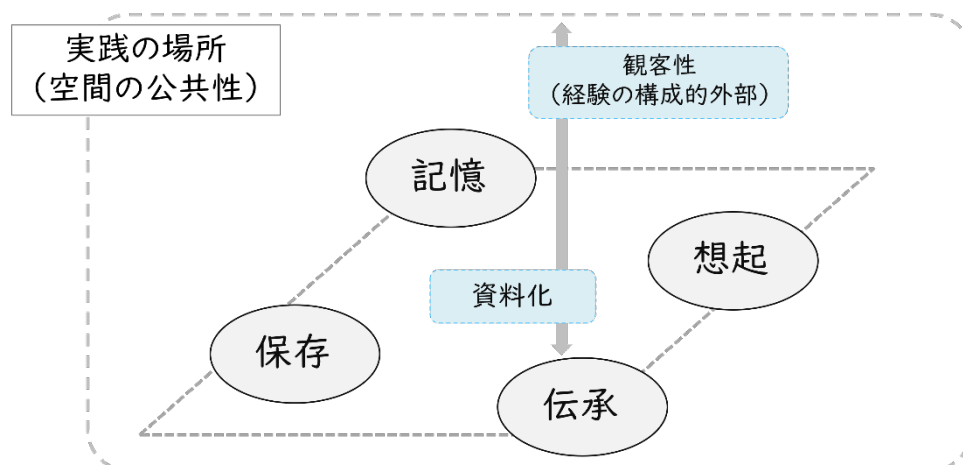


図1 震災伝承における概念関係のイメージ

4. 令和6年度研究の全体像に対する認識・評価

震災伝承の社会的意義を明確にするための理論的・経験的な調査を進めてきた。さらに、科研費や財団助成といった競争的外部資金を獲得し、移動・モビリティを切り口に、現代社会における科学技術の道徳的意義についても研究を展開してきた。両者の研究による知見を有機的に結びつけることで、原発事故によって長期化・広域化した避難や多拠点生活といった被災地域社会の実態と復興および持続可能性について多角的な視点を得ることができている。これらは、学会発表13件、査読付論文3件といった成果に結びつけることができた。

研究活動に加えて、被災地に常駐する研究者として、外部の研究者との連携や研究協力を推進しハブ的な役割を果たすことができた。特に、日本質的心理学会大会イベントへの協力（8月）、日本都市学会特別セッションの企画・運営（10月）といった伝承館内外の研究者との連携やネットワーキングを進めることができた。また双葉町や浪江町をフィールドとする共同研究の立ち上げや外部資金の獲得も進めながら、研究資源を活用した被災地における調査・研究の中長期的な基盤構築にも取り組むことができた。ほか、アウトリーチの一環で伝承館のエントランスに研究の全体像や成果の概要を説明するパネル（図2）を作成し、展示している。

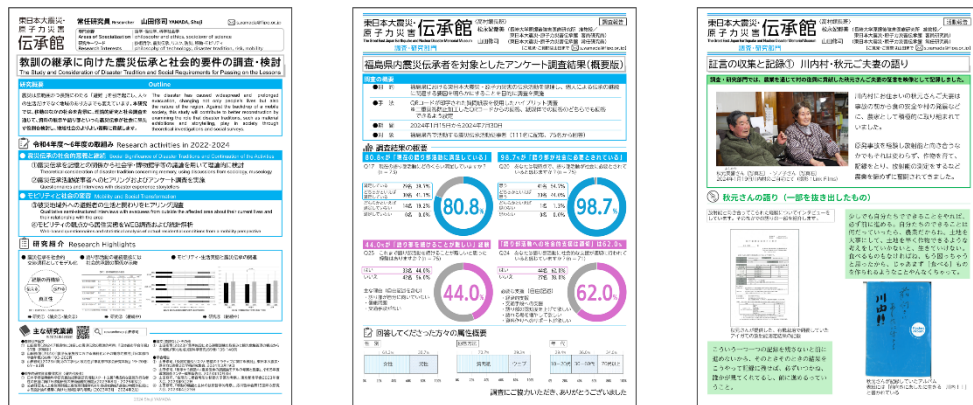


図2 展示パネル（左：研究概要、中央：語り部調査、右：証言映像）

5. 成果・活動

(1) 外部研究費の獲得状況

- ・日本学術振興会科学研究費助成事業・研究活動スタート支援、「構造的な道徳的行為者性の把握に向けた移動研究の技術倫理的展開（課題番号:23K18617）」、2023年8月－2026年3月〔研究代表者〕【継続】
- ・公益財団法人窓研究所 2024年度助成事業、「複合災害地域における帰還困難区域の伝統工芸伝承 13 年 大堀相馬焼をケーススタディとして」、2025年3月-2027年3月（研究代表者：立教大学・高山真）〔共同研究者〕【新規】
- ・日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究 C、「関係の自律としてのモビリティの構想に向けた技術哲学的研究」2025年4月－2028年3月〔研究代表者〕【新規】（※採択）

(2) 書籍（単著・分担執筆含む）

- ・山田修司、災害の記憶の場所と資料化の概念、松本行真編著『災禍の民衆知と避難行動の比較分析』東信堂、231-252、2025

(3) 論文

- ・山田修司、観客性に注目した震災伝承の理論的考察、日本都市学会年報、57 巻：231-238、2024【査読有】
- ・山田修司・静間健人、震災伝承施設の利用意向に関連する要因の探索的検討、日本都市学会年報、58 巻、2025【査読有】（※掲載決定）
- ・静間健人・山田修司、東日本大震災・原子力災害に関する情報接触と当事者意識の世代間比較、日本都市学会年報、58 巻、2025【査読有】（※掲載決定）

(4) 口頭発表

- ・山田修司、関係の自律としてのモビリティーズ：技術論の観点から、応用哲学会第 16 回年次研究大会（2024 年 6 月 1 日、オンライン（Slack））

- ・ 静間健人・山田修司、東日本大震災・原子力災害に関する情報への接触状況についての調査、日本都市学会第 71 回大会（2024 年 10 月 26 日、石巻魚市場）
- ・ 山田修司・静間健人、震災伝承施設の利用意向に関連する要因の探索的検討、日本都市学会第 71 回大会（2024 年 10 月 27 日、石巻魚市場）
- ・ 山田修司、避難と帰還のあいだ：論点と展望、日本都市学会第 71 回大会特別セッション（2024 年 10 月 27 日、石巻魚市場）
- ・ 山田修司・静間健人、震災伝承施設は観光対象か？—2024・2025 年ウェブ調査報告一、東日本大震災・原子力災害第 3 回学術研究集会（福島：2025 年 3 月 19 日、コラッセふくしま）
- ・ 松永妃都美・山田修司・高村昇、福島県の複合災害を継承する語り部の困難経験に関連する要因、東日本大震災・原子力災害第 3 回学術研究集会（2025 年 3 月 19 日、コラッセふくしま）
- ・ 鈴木ミチル・杉山高志・安斎聡子・佐藤由紀・杉浦彰子・宮前良平・山田修司・静間健人、震災体験の語りの方法と時間の構造—福島県双葉町での語り部と街歩きの事例から—、東日本大震災・原子力災害第 3 回学術研究集会（福島：2025 年 3 月 19 日、コラッセふくしま）
- ・ 静間健人・山田修司、東日本大震災・原子力災害に関する社会課題への人々の関心の風化、東日本大震災・原子力災害第 3 回学術研究集会（福島：2025 年 3 月 20 日、コラッセふくしま）
- ・ 松永妃都美・山田修司・高村昇、福島県の複合災害を継承する語り部の困難経験に関連する要因、第 95 回日本衛生学会学術総会（2025 年 3 月 21 日、ソニックシティ）

(5) ポスター発表

- ・ 山田修司・静間健人、モビリティの観点による震災伝承の検討、令和 6 年度環境創造センター成果報告会（2024 年 6 月 25 日、コミュタン福島）
- ・ 静間健人・山田修司、日常生活における東日本大震災・原子力災害についての情報探索行動、令和 6 年度環境創造センター成果報告会（2024 年 6 月 25 日、コミュタン福島）
- ・ 鈴木ミチル・杉山高志・安斎聡子・佐藤由紀・杉浦彰子・宮前良平・山田修司・静間健人、語りの形式の違いによるナラティブの時間の特徴—東日本大震災の被災者の語りを例に一、日本質的心理学会第 21 回大会（2024 年 10 月 19 日、成城大学）
- ・ 静間健人・山田修司、東日本大震災・原子力災害に関する当事者意識と価値観—Web 調査データの分析—、日本リスク学会第 37 回年次大会（2024 年 11 月 16 日、静岡県立大学）

(6) 社会貢献活動等

(なし)

(7) その他

1. メディア掲載

- ・福島民友「語り部『積極的に活動したい』79%」（2025年11月1日3面）〔松永客員研究員との語り部調査〕
- ・福島民報「活動継続難しい44%」（2025年11月1日2面）〔松永客員研究員との語り部調査〕
- ・読売新聞「語り部4割継続『難しい』」（11月18日付27面）〔松永客員研究員との語り部調査〕
- ・NHK「はまなかあいづ TODAY」生中継インタビュー（2025年3月11日）

2. 学会活動

- ・日本都市学会第71回大会特別セッション「避難と帰還のあいだ」（2024年10月27日、石巻魚市場）の企画立案・運営等

3. 非常勤講師

- ・岩手看護専門学校（担当科目：倫理学）
- ・相馬看護専門学校（担当科目：論理的思考）
- ・岩手大学人文社会科学部（担当科目：環境倫理学）

■大杉 遥 OSUGI, Haruka（令和5年4月～）

1. 研究キーワード

放射性廃棄物、理解醸成活動、科学技術コミュニケーション、対話・語り

2. 所属学会

日本原子力学会

3. 令和6年度の調査・研究

3.1. 研究テーマ

原子力防災に関する勉強会の実践

3.2. 概要

2024年4月に静岡県静岡市にて原子力災害への備えである「原子力防災」を知することを目的とした勉強会を開催したことで、原子力防災や放射線、エネルギー教育の機会設定について知見が得られた。

3.3. 研究内容

「原子力防災」は、原子力発電所で事故が起きた場合などの、放射線からの避難、防護といった身を守るための行動の知識である。2011年3月に発生した東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所の事故では、周辺住民は避難を余儀なくされた。さらに、南海トラフ地震、首都直下地震などの大規模災害が予測されており、今後も複合災害に伴う原子力災害へ

の備えが必要である。一方で、原子力防災教育の普及・定着はされておらず、取組に地域差があることが課題である。以上のことから、原子力及び放射線の「リスク」と「安全・安心」について、専門家と一般市民が出会い、対話し、協働に発展するための機会となる場所づくりが必要と考え勉強会を開催した。

3.4. 研究成果

勉強会には、原発が立地する都道府県に関係なく、全国各地から 20 代～60 代までの幅広い年齢層が参加した。原子力防災を知のことをきっかけに、過去の原子力災害の経験、原子力発電所の廃止措置、放射性廃棄物の最終処分などの課題についての興味関心が明らかとなり、それらの話題についても対話の場を提供することが可能になることが示唆された。

4. 令和 6 年度研究の全体像に対する認識・評価

勉強会の実践を経て、市民に対する情報提供の機会づくりについて知見が得られた。初期の質問において情報についてわからないと回答する「無関心層」に該当する市民に対して、「防災」といった興味関心に沿ったテーマの切り口から情報を伝える機会づくりが可能であることが示唆された。

また、勉強会の前に事前学習会の機会を設けて、簡単な予備知識の学習を行うことで、「原子力防災」への興味関心を引き付けることができ参加者増加のきっかけとなった。

5. 令和 7 年度以降の研究計画

継続的に静岡市民が主体となって進める原子力防災・および放射線について学ぶ機会づくりの進展のサポートや活動の記録を行う。また、勉強会の際に対話の場を設け市民の意見を記録として収集する。さらに静岡市で行った勉強会をモデルケースとして、他県においても地域の特色や話題に合わせた『原子力防災』の勉強会を開催し、並行して放射線やエネルギーの話題を含んだ勉強会を開催し、地域の反応を観察する。

また、浜通り地域においても勉強会の手法を用いた福島第一原子力発電所の廃炉や廃炉で発生する放射性廃棄物について情報を得て、対話や意見交換ができる機会づくりを実践し、その経過を記録する。

6. 成果・活動

(1) 外部研究費の獲得状況

(なし)

(2) 書籍（単著・分担執筆含む）

(なし)

(3) 論文

(なし)

(4) 口頭発表

- ・ 太杉遥「市民団体による原子力防災を学ぶ勉強会の実践に関する報告」日本原子力学会 2024 年秋の大会（2024 年 9 月 12 日、東北大学）

(5) ポスター発表

- ・ 太杉遥、原子力防災を知る機会づくりに関する実践の報告、令和 6 年度環境創造センター成果報告会（2024 年 6 月 25 日、コミュタン福島）

(6) 社会貢献活動等

1. 出前講義

(なし)

2. 講演

- ・ 福井大学、令和 6 年度レジリエント社会・地域共創シンポジウム「東日本大震災・原子力災害伝承館研究員の視点－民間活動の紹介」（2024 年 12 月 7 日）

3. 委員

(なし)

4. 企画・運営等

- ・ 情熱クラブ一般社団法人、「原子力防災勉強会」（2024 年 4 月 27 日）

(7) その他

(なし)

3 節 報告会等

1. 調査・研究部門活動報告会

伝承館の調査・研究部門の活動成果を一般の方向けに発信することを目的として、館長、上級研究員、常任研究員が令和 6 年度の活動内容を発表した。当日は現地で 20 名、オンラインで約 100 名が参加し、活発な議論が行われた。

日時：令和 6 年 12 月 19 日（木）13：00～16：45

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 研修室

発表者	活動内容
館長 高村昇	「福島における環境放射能、放射線リスクコミュニケーションとリスク認知の変遷」
上級研究員 安田仲宏	「東日本大震災・原子力災害における放射線防護対策の検証～次の世代に伝承すべきこと～」
上級研究員 関谷直也	「処理水放出後の心理的影響に関する国際比較研究」

上級研究員 開沼博	「石の上にも3年：研究・教育・社会連携の融合と持続可能性の確立」
常任研究員 葛西優香	「復興過程のまちづくり研究～浪江町における実践事例を通じて～」
常任研究員 静間健人	「東日本大震災・原子力災害過程における情報利用環境についての調査と考察」
常任研究員 山田修司	「福島における震災伝承の現状と意義に関する調査・検討」
常任研究員 大杉遥	「原子力防災および福島第一原発の廃炉の勉強会に関する報告」



当日の様子

2. 東日本大震災・原子力災害 学術研究集会

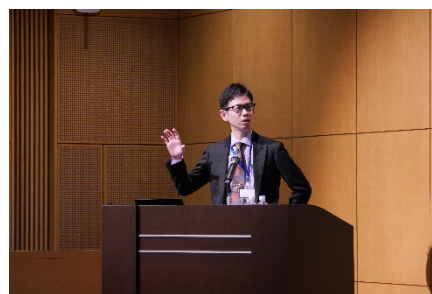
伝承館における調査・研究活動の推進及び人材育成のため、東日本大震災及び原子力災害に関わる研究者等が各研究活動の発表を行う「東日本大震災・原子力災害 第3回学術研究集会」を開催した。2日間で86名からの発表があり、延べ約320名の参加があった。

会場のコラッセふくしまには、全国から東日本大震災や原子力災害に関わる研究者が集まり、原子力災害とまちづくり、風評被害、行政対応や、放射線の影響など多様なテーマの発表が行われた。また、各セッションにおいて活発な議論が行われた。

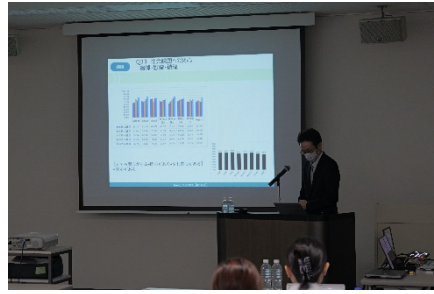
日時：令和7年3月19日（水）10：00～18：00

令和7年3月20日（木）10：00～16：30

場所：コラッセふくしま



1日目の様子



2日目の様子

3. 福島県知事に活動内容を報告

日時：令和6年11月28日（木）14：00～14：30

常任研究員4名が内堀雅雄福島県知事を訪問し、研究活動を報告した。高村昇館長、関谷直也上級研究員、福島イノベーション・コースト構想推進機構 戸田光昭専務理事が同席した。



当日の様子

4 節 福島国際研究教育機構（F-REI）との連携

伝承館が共同研究機関として参加する F-REI 委託研究

伝承館はF-REI が実施する委託研究事業のうち3事業に共同研究機関として参加している。

（1）令和5年度「原子力災害からの復興に向けた課題の解決に資する施策立案研究」委託事業

ア．原子力災害に関するデータや知見の集積・発信（原子力災害医療科学）

代表機関：長崎大学

概要：放射線リスク評価など原子力災害医療科学に関する知見を集積・分析し、国際放射線防護委員会（ICRP）、国際原子力機関（IAEA）等の国際機関をはじめとする国内外の関連研究機関と連携し、国際的な防災・減災の指針の策定に貢献する。

イ．原子力災害に関するデータや知見の集積・発信（大規模災害とデータサイエンス）

代表機関：東京大学

概要：原子力災害に関するデータや知見の集積の観点から、「福島経験」に関してマスメディア、行政広報、ソーシャルメディアが行った情報発信のデータを収集するとともに、それらの情報が人の行動・心理に与えた影響を分析することで、大規模災害時の情報提供のあり方に関する教訓を抽出する。

(2) 令和5年度「福島浜通り地域におけるまちづくり研究及びラーニング・コミュニティハブ整備」委託事業（テーマ（2）福島浜通り地域におけるラーニング・コミュニティハブの整備）

ア．コミュニティ&コミュニケーションの場の創出に関わる実践研究

代表機関：東京大学

概要：福島浜通り地域に、F-REI を核とした学び・気づきのコミュニティ&コミュニケーションの場を創出し、将来の地域の担い手となる若者による未来課題の解決を実現する。

5節 その他

福島県環境創造センター成果報告会

日時：令和6年6月25日（火）10：30～12：00

環境創造センターで開催された成果報告会にて常任研究員がポスター発表を行った。



当日の様子

7章 イベント・広報

1 節 イベント

1. セタイベント

日時：令和6年7月6日（土）～8月11日（月）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館1階エントランスホール ほか

来館者に福島へのメッセージや願いを短冊に書いていただき、飾ることで、震災・復興について考える契機となるよう「セタイベント」を開催した。

7月6日・7日には、双葉町両竹地区から採取した実際の竹を展示し、「セタまつり」として、放射線の飛んだ跡を観察できる「霧箱」の展示や、当館学芸員による「地震と津波のメカニズム実験」を行った。また、浪江消防署の協力による起震車体験等のほか、当館と双葉町産業交流センター、浅野撚糸（株）の合同によるスタンプラリーを実施し、2日間合わせて180名以上の方がブースを訪れた。



2. 双葉花火

日時：令和6年9月28日（土）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館、福島県復興祈念公園予定地

この地域における最大規模のイベントであり、当日は1万発の花火が打ち上げられ、約3,500人が参加した。



3. ふくしま防災・伝承パーク

日時：令和6年10月5日（土）・6日（日）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 1階エントランスホール ほか
福島県生涯学習課と連携した防災イベントであり、防災ワークショップ（ダンボールジオラマや自転車を使った発電体験等）を実施した。

また、同日に双葉町の主催による「ふたばフードフェス」が開催され、多くの人でにぎわった。



4. ホープツーリズム体験周遊バス

日時：令和6年8月10日（土）～12日（日）、11月2日（土）・3日（日）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 ほか

福島県観光交流課の主催により伝承館を発着とした巡回バスによるモニターツアーを開催した。福島県復興祈念公園予定地や請戸小学校、道の駅なみえ等を周遊し、全5日間の日程で延べ198名が巡回バスに乗車した。

5. 対話福島 2024

日時：令和6年12月7日（土）・8日（日）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 1階研修室

福島県出身の映画監督である今泉力哉氏と当館の上級研究員である開沼博氏が「記す」をテーマに対談を行うほか、両氏と参加者による対話も行われた。



6. 大阪・関西万博復興庁展示 100 日前イベント in 福島

日時：令和 7 年 2 月 8 日（土）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館エントランスホール

復興庁主催でステージイベントや大阪・関西万博復興庁展示の概要紹介パネルの展示を実施した。ステージイベントには PR アンバサダーの荒川静香さん、伊藤復興大臣、内堀知事、伊澤双葉町長らが出席した。



7. 3.11 メモリアルイベント

日時：令和 7 年 3 月 8 日（土）、9 日（日）、11 日（火）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館エントランスホール ほか

福島県と連携し、東日本大震災・原子力災害の発生から 14 年目となる 3 月 1 日に合わせて、「3.11 メモリアルイベント」を開催した。

(1) トークセッション（エントランスホール）【3 月 8 日（土）】

テーマ「若い世代が考える震災伝承」11：00～12：00

「いのちをつなぐ未来館」職員 川崎 杏樹 氏

NPO 法人富岡町 3.11 を語る会 宗像 涼 氏

ファシリテーター フリーアナウンサー 小野寺 彰子 氏





(2) 3.11 を学ぶバスツアー (双葉町～浪江町) 【3月8日 (土)】

ガイド：まちづくりなみえ 菅野 孝明 氏

(3) 語り部講話 (エントランスホール) 【3月8日 (土)・9日 (日)】

【3/8】語り部：木村 紀夫さん (大熊町)、岡 洋子さん (浪江町)

【3/9】語り部：高倉 伊助さん (双葉町)、大谷 慶一さん (いわき市)

(4) 3/11 追悼イベント 【3月11日 (火)】

14:30～	東日本大震災追悼復興祈念式 (インターネット中継) 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館エントランスホール 「パルセいいざか (福島市)」の式典の様子を生中継
15:00～	地域の民俗芸能披露 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館エントランスホール 伝承館の企画展と関連する地域の民俗芸能を披露
17:00～	大川義秋氏による箏生演奏 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館エントランスホール 福島県双葉町出身の箏奏者である大川氏による生演奏
18:00～	追悼花火 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 屋外



(5) 双葉花火 8 K 3 D 映像上映会【3月8日(土)～11日(火)】

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 1 階研修室

令和 6 年 9 月 28 日(土)に伝承館を会場として行われた「双葉花火」の 8 K 3 D 映像の上演会を実施した。4 日間で 327 名が視聴した。

(6) その他関連イベント

3.11 ふくしま追悼復興記念行事 キャンドルナイト【3月11日(火)】

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 アーカイブ広場

2 節 広報

1. イベント出展

伝承館を広く多くの方に知っていただくとともに、福島の「今」について正しい情報を発信するため、県内外の防災イベント・風評払拭イベントに出展した。

・「浜フェス」(令和 6 年 10 月 19 日(土)～20 日(日) 東京・六本木ヒルズ)

2. 情報発信

(1) 企画展やイベント、来館 30 万人到達時など積極的にプレスリリースを行い、報道機関の取材につなげている。令和 6 年度は 28 本発表。新聞、テレビ等で確認できた範囲で 235 件報道された。

(2) 伝承館ホームページにより、各種イベントや語り部講演、研修等の事業についてきめ細かに発信するとともに、SNS を活用した情報発信を計 500 回実施した。令和 6 年 10 月に亡くなられた俳優、西田敏行さん関連の投稿や震災発災日近くにロケで見学に訪れたお笑い芸人のパンサー尾形貴弘さん(宮城県東松島市出身)らタレントの来館が注目を集めた。

3. プロスポーツチームや観光施設との連携

(1) いわき FC と連携したホームゲーム観戦チケットによる入館料割引(令和 5 年 4 月～)

(2) アクアマリンふくしまと入館料相互割引(令和 5 年 7 月～)

- (3) J ヴィレッジと相互優待（令和5年8月～）
- (4) 福島ファイヤーボンズと連携し入館料割引（令和5年8月～）
 - ・ ホームゲームでのブース出展（令和7年1月11日（土）～12日（日））
福島ファイヤーボンズと対戦相手の熊本ヴォルターズのブースター（ファン）に対し、伝承館の取組を紹介したほか、写真パネルで複合災害について伝えた。



来館者 30 万人到達



パンサー尾形さん来館

8章 東日本大震災・原子力災害伝承館の 運営に関する有識者懇談会

1 節 東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会

伝承館が掲げる基本理念を着実に実現するとともに、伝承館のより良い管理運営と良質なサービス提供を図るため、地元及び各分野の専門的な見地からの意見や助言を得ることを目的として、「東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会」を令和3年3月に設置している。

また、伝承館の調査・研究事業の質の確保・向上を図るため、専門的な見地からの意見助言を得ることを目的として、令和5年3月に有識者懇談会に調査・研究専門部会を設置した。

1. 令和6年度の開催

令和5年度から有識者懇談会を事業年度終了後に開催することとした。

- ・令和5年度分を令和6年5月23日（木）に開催した。

（詳細は以下にて公開）

<https://www.fipo.or.jp/lore/archives/6057>

- ・令和6年度分は令和7年6月11日（水）を予定。

2. 懇談会委員構成

（令和6年4月1日現在）

所属・職	氏名	備考
福島大学共生システム理工学類 客員教授	小沢 喜仁	学識経験者
福島大学共生システム理工学類 教授	川崎 興太	学識経験者
福島大学教育推進機構 准教授	前川 直哉	学識経験者
双葉町長	伊澤 史朗	地元代表
NPO法人富岡町3.11を語る会 代表	青木 淑子	地元代表
福島県教育委員会 教育次長	箱崎 兼一	教育関係者
福島県観光物産交流協会 理事長	守岡 文浩	教育旅行/研修関係者
福島民報社（常務取締役郡山本社代表）	鞍田 炎	その他（報道）
福島民友新聞社（取締役郡山総支社長）	小野 広司	その他（報道）
クラシノガッコウ月とみかん 代表	大場 美奈	地元代表

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に 関連した新聞記事

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事

令和6年度、東日本大震災・原子力災害伝承館の活動は、新聞社等に多数取り上げられました。新聞社に取り上げられた東日本大震災・原子力災害伝承館に関連している新聞記事を抜粋し、一覧として紹介します。

また、東日本大震災・原子力災害伝承館の活動のうち、新聞社から許可を得た記事の写しを紹介します。

※掲載記事見出し（または概要）に○を付した新聞記事（WEB版では省略）

（4月分）

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
4	4	木	福島民報	3	○来館者過去最多9万3759人
4	4	木	福島民友	3	伝承館、最多9万人来館
4	9	火	福島民報	1	国の情報発信改善必要
4	12	金	福島民報	17	過ち繰り返さないために
4	20	土	福島民報	21	DC2026年本県開催 ワンランク↑の福島へ
4	20	土	福島民友	19	26年本県DC 観光回復へ絶好機
4	21	日	福島民報	13	ファミマ新入社員、県内で研修 被災地復興に理解

（5月分）

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
5	17	金	福島民友	1	○除染土の県外最終処分 高校生、認知進まず
5	17	金	福島民報	22	除染土壌の県外最終処分 「知っていた」3割
5	19	日	福島民報	2	被ばくや原子力防災理解を 来月から双葉の伝承館専門講座を開講
5	19	日	福島民友	5	復興祈念公園の整備 追悼と伝承へ一層の周知を
5	23	木	福島民報	2	○震災前後の土地比較 双葉、伝承館に時層地図導入
5	24	金	福島民報	2	○伝承館運営の在り方に意見 双葉で有識者懇
5	31	金	福島民友	10	震災前後の被災地比較 双葉の伝承館「時層地図」作成

（6月分）

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
6	2	日	福島民友	2	○ブラジル日系人が本県復興状況学ぶ 双葉町など訪問
6	5	水	福島民報	2	震災語り部海外初派遣
6	5	水	福島民友	3	県内学校に語り部派遣
6	12	水	福島民友	5	原発事故の理解度 次世代に伝える責務がある
6	22	土	福島民友	5	伝承館の仏出展震災 震災関連資料も
6	22	土	福島民友	10	かえるマラソンゼッケン提示で伝承館入館料割引

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事

(7月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
7	7	日	福島民報	11	来館者 30 万人突破
7	7	日	福島民友	18	○伝承館来館 30 万人
7	7	日	福島民報	1	○復興の願い込め 双葉で七夕イベント
7	18	木	福島民報	2	「未来への手紙」を募集
7	20	土	福島民報	23	○再興誓う大輪輝け 双葉で9月花火大会
7	21	日	福島民友	4	○「福島と放射線」題材伝承館で企画展開幕
7	21	日	福島民報	13	放射線と災害伝える 双葉伝承館で企画展開幕
7	21	日	福島民友	25	復興感じてほしい 迫るインターハイ
7	24	水	福島民報	3	双葉町の20歳祝う式典 来年は開催せず
7	28	日	福島民報	11	震災、原発事故教訓伝える 県がホープツーリズム
7	28	日	福島民友	26	○震災復興学ぶ機会に

(8月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
8	29	木	福島民報	13	○東京の墨田区役所で出張展

(9月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
9	15	日	福島民報	21	被災地の“息吹”全身に 福島復興サイクルロードレースシリーズ

(10月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
10	12	土	福島民友	12	○東邦銀若手行員が双葉など視察研修

(11月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
11	1	金	福島民報	2	活動継続難しい44%県内の語り部調査
11	1	金	福島民友	3	○語り部「積極的に活動したい」79%
11	3	日	福島民報	1	○収蔵資料海外で初展示
11	3	日	福島民報	2	原発再稼働 ゼロリスクは幻影
11	19	火	福島民報	13	郡山出身映画監督今泉さんと対談を
11	29	金	福島民報	2	○伝承館研究員ら知事に成果報告
11	29	金	福島民友	4	祭りと復興研究報告 伝承館館長ら、知事訪問

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事

(12月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
12	2	月	福島民報	20	浜通り、「食」切り口に映画化
12	4	水	福島民報	2	語り部に大臣感謝状
12	4	水	福島民友	4	震災語り部に感謝状
12	14	土	L'Est Républicain		Fukushima:une délégation japonaise pour l'inauguration d'une exposition
12	20	金	福島民友	3	伝承館研究員が状況報告
12	22	日	福島民友	2	○民俗芸能復活の歩み 伝承館で企画展
12	22	日	福島民報	15	双葉の文化守る姿紹介 3月まで伝承館で企画展開始
12	23	月	福島民報	13	○震災の風化防止訴える 双葉の伝承館で研究員報告会
12	24	火	毎日新聞	19	○伝統の祭り次代につなぐ 双葉で来年3月24日まで企画展
12	28	土	福島民友	10	○林業再生取り組み紹介 伝承館で来月22日まで
12	31	火	福島民報	4	シン・みらいチャレンジプログラム

(1月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
1	1	水	福島民友	21	災害文化
1	3	金	福島民報	29	○「鮭のぼり」アートに
1	5	日	福島民報	10	森林・林業の現状伝える 林野庁、双葉で展示イベント
1	9	木	福島民友	12	学びと体験の旅へ
1	10	金	福島民報	2	○放射線被ばくの健康影響学ぶ
1	15	水	福島民友	20	阪神大震災30年 きょうから双葉でも企画展
1	16	木	福島民報	20	○阪神大震災あす30年 30年の教訓双葉で発信
1	16	木	福島民友	3	県、3・11 追悼復興祈念式
1	18	土	福島民友	10	復興の軌跡と教訓 双葉・伝承館兵庫施設と共催展
1	18	土	福島民報	23	阪神大震災30年 伝承館パネル展多くの人見入る
1	23	木	福島民報	2	被災地の民俗芸能
1	26	日	福島民報	3	○震災後の福島 作品で表現へ
1	27	月	福島民報	1	消費者庁の県産品風評対策事業
1	27	月	福島民報	2	復興への研究成果発表
1	27	月	福島民友	4	○震災の研究成果披露
1	27	月	福島民友	20	浜通りの日常アートに
1	29	水	朝日新聞		○伝統芸能の継承被災地再生の絆 双葉で企画展
1	29	水	福島民報	11	○原発事故の教訓生かす

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事

(2月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
2	2	日	福島民友	9	震災語り部に尽力高倉さんに感謝状
2	7	金	福島民報	2	入館7万人超目標上回る
2	7	金	福島民報	2	復興庁あす大阪万博イベント
2	9	日	福島民報	2	○「万博で福島発信」 復興庁展示100日前イベント
2	9	日	福島民友	22	万博「復興PR」展示紹介 双葉伝承館で100日前イベント
2	15	土	福島民報	13	「福島学カレッジ」修了制作展 中高生、「私と福島」10作品に
2	15	土	福島民報	3	○震災前に使用「巨大ダルマ」 双葉町が伝承館に寄贈
2	15	土	福島民友	3	巨大双葉ダルマ22日にお披露目 伝承館、町から寄贈受け
2	17	月	朝日新聞		人とのつながりを実感防災情報を発信
2	23	日	福島民報	2	○震災乗り越えた民俗芸能 双葉の伝承館で披露
2	23	日	福島民報	2	巨大双葉ダルマ来館者びっくり
2	23	日	福島民報	2	伝承館、展示充実 訪日客対応を強化
2	23	日	福島民友	2	踊りや神楽、民俗芸能集合 双葉・伝承館でイベント
2	23	日	福島民友	2	○巨大ダルマもお披露目
2	25	火	読売新聞	25	双葉の歴史伝えるダルマ

(3月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
3	2	日	福島民友	4	双葉の伝承館、常設展刷新
3	2	日	福島民友	4	双葉花火3D映像8～11日に上映
3	2	日	福島民報	10	○避難指示地域の新資料並ぶ 双葉伝承館が常設展示更新
3	2	日	福島民報	10	「双葉花火」上映会伝承館
3	3	月	読売新聞	29	震災伝承施設カードに
3	7	金	福島民友	12	○伝承館見学、涙流した18歳
3	11	火	福島民友	6	○未来に伝えたい私の思い①
3	11	火	福島民報	15	あの日を忘れず語り継ぐことが大切未来をつくる子どもたちのために世界中の若者たちのために
3	12	水	福島民報	1	○東日本大震災、原発事故から14年
3	12	水	福島民報	3	県内各地で追悼行事 伝承館に癒しの音色
3	12	水	福島民報	28	震災・原発事故14年
3	12	水	福島民友	4	○各地で復興・追悼行事
3	21	金	福島民友	4	○変形ガードレール展示

冊子版では、このあと84ページから112ページにかけて新聞記事が掲載されていますが、WEB版では、著作権の関係で該当ページを削除しております。ご了承ください。

東日本大震災・原子力災害伝承館 令和6年度 年次報告書

令和7年7月 発行

■発行 公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構
東日本大震災・原子力災害伝承館
〒979-1401 福島県双葉郡双葉町大字中野字高田 39
T E L : 0240-23-4402
F A X : 0240-23-4403
e-mail : archive@fipo.or.jp
W E B : <https://www.fipo.or.jp/lore/>

■印刷 株式会社山川印刷所

© The Fukushima Innovation Coast Promotion Organization 2025 Printed in Japan

*無断転載を禁じます。

公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構の取組みは 以下のURLからご覧いただけます。 https://www.fipo.or.jp/
